
キツネ坂

千ノ葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネ坂

【Nコード】

N0332U

【作者名】

千ノ葉

【あらすじ】

裕は車に揺られて、田舎道を走っていた。目的地は自分の故郷だ。七年ぶりの街は無情にも時間に翻弄され姿を変えていた。彼はそんな街で変わらない何かを見つけようと、思い出の坂を登る。小さい頃？あの子？と一緒に見た風景を。

しかし、彼の思惑とは違い、神聖な景色さえも姿を変えていた。変わっていないのは夕陽の色、ただ一つだけだった。

だが、彼は運命の再開を果たす。その人物は、逢いたい？あの子？と瓜二つであった。

彼女の仕草に？あの子？の存在を感じながら、裕は新天地での生活を送っていく。

たまに神様の気まぐれに惑わされながら、裕は大切であったものを取り戻していく。

【小さな神様】と【秋】の恋愛ストーリー。

プロローグ ― 秋めく峠と幻影 ―

この世界を構成しているものはなんなのだろう？

目に入る夕陽も、頬をなぞる風も、この草木の匂いも
本当は嘘ではないのだろうか？

これが現実であるという確証はない。しかし……

僕は握られている少女の手の温もりを確かめるように、右手にほんの少しだけ力を込める。

少女はそれに応えるように、手を握り返してくれる。

その感触は強く、柔らかく、そして優しい。

この温もりだけは信じたかった。たとえ世界のすべてが嘘だとしても――

これだけは本当であると信じたい。

ゆっくりと僕たちは包装された道を登っていく。

この道はどこまで続いているのだろうか？

永遠――それでも言い。ここにずっと居られるのなら。

しかし、僕の足が止まらないように彼女は僕の少し前を歩いていく。
永遠だと思われた道は終わり、終着点が見えてきた。

いつものベンチに腰を降ろし、僕たちは夕陽の峠から町を見下ろした。

いつか見たその風景は、とても綺麗なものであった。

「ねえ、裕ちゃん」

「なに？」

彼女は少し寂しそうな顔を向け、僕と会話をする。

彼女も感じているのだろう。これが最期であるということ――
僕はいつの間にか泣いていた。

「泣かないで。大丈夫だよ」

僕より身長が数センチ高いからって、彼女はいつも姉責ぶる。

本当は僕より寂しがり屋で怖がりだというのにさ。

「ねえ、裕ちゃんは一の事、どう思ってるの？」

「……………」

「そっか。やっぱりね」

彼女はうつむく僕を置いて、ベンチを立ち上がり、柵に手をかけた。
「これが私からの最期の魔法だよ」

彼女は笑った。その笑顔は強がりでも何でも無くて、僕が一番見たいと思うものであった。

帰郷。思い出の場所へ

僕は車に揺られて、田舎道を走っていた。ロクに舗装されていない道は車体を揺らし、その度に、座席に詰めた荷物がガタガタと悲鳴をあげる。ここまで揺れると割れモノが心配になる。いくら新聞紙で包装してあるといっても、この長旅で割れてない保証はどこにもない。やはり素直に宅配便で送ればよかったかと少し後悔している。だが僕にはこだわりがあるのだ。慣れていないお茶碗じゃないと美味しくご飯を食べられないのだ。だから引越しの最後の日までお気に入りの茶碗で美味しいご飯を食べて出て来たのだ。その選択が正しかったと思いたい。

「裕、この辺り、覚えているか？」

僕が私事を考えている間に運転席の父親が僕へと話しかけてくる。その言葉を聞き、僕は外へと目を移した。

車の横を通り過ぎる景色は秋色に染まっていた。黄金の穂をつける田園。赤や黄色に染まる木々、そして、頬をなぞる冷たい北風――
——これらはすべて思い出せる……いや、思いだしたんじゃない。この風景はずっと僕の胸の中心にあったものだ。だから懐かしいという感情は出てこなかった。ただこの風景を見ているとやはり落ち着くのだ。

これが故郷の良さってもものだろうか。十七歳でそんなことを思うなんて、ずいぶん心が老けているのではないかと苦笑してしまう。

僕は秒速十一メートルで進む田舎道の風景を飽きることなく見続けた。

しばらくすると景色は徐々に姿を変えていく。道路はコンクリートで舗装され、横には様々な真新しい建物が見えてきた。

「へえ、ウワサ通り、開発されたんだな。この町も」

父はその街並みを見て感心しているようだったが、僕はそうは思

わない。何なのだろう。この違和感？ 近代的な鉄の塊が田畑を覆い隠し、太陽の光さえも少なくなつたように感じる。心の風景はない？それ？は僕を苛立たせる。

高くそびえ立つビルを睨むが、車の速度はそんなことお構いなしに鉄の塔に向かい道を走っていく。

しばらく走つたところで車は速度を落とす。僕にもこの周辺は見覚えがあつた。それはそうだろう、僕の実家はこの近くのだからこの辺りの風景は然程変わっていないように感じる。だが、少し目を凝らして見てみると、小学校の頃によく行つた駄菓子屋。その入り口はカーテンが閉められており、店の前にあつた自動販売機も無くなっている。辞めてしまつたのだろうか？ それとも今日はお休みなだけなのだろうか？ 判断はできない。けれどその些細な変化は、ここでの時間の経過を僕に示すのだ。

信号待ちで止まつた自動車の中で僕はそんなことを思った。

車は商店街を抜け、閑静な住宅街へと進んでいく。この辺りのことは僕の庭といつてもいいほど知っている。どこにどの同級生が住んでいるかだつて言える。引越しが無ければという前提付きだが、そしてやつと赤い屋根の家が見えてきた。それを目印にするかのように父は、その家の敷地内へと車を止めた。父の手慣れた車庫入れなどを見ていると、ここが自分の実家だという実感が持てる。一緒に車を出て玄関へと足を運ぶ。その短い間に庭などを見渡したが、大した変化はない。雑草が生い茂っていないことから推測するに、姉貴はしっかりと庭の管理をしているようだ。

父がチャイムを押すと中から女性の声がし、玄関の扉が開いた。「いらつしゃい。お父さん、裕」

中からは僕より背丈が二周りほど小さい女性が顔を出した。彼女は僕の姉である、津谷 海晴だ。現在は社会人三年目で、年は僕より四つ上の二十一歳だ。

「お父さん、運転大変だつたでしょ？ 少し休みなよ。今、コーヒ

「出すから」

「ああ。助かるよ」

父は姉の言葉に甘え、居間の方へと向かったらしい。僕もそれに追従して玄関を上がろうとしたところ、姉の言葉に足を止められた。「あら、裕。また背が伸びた？」

姉貴は僕の頭を背伸びして撫でて来る。つま先をプルプルさせながら、僕のとっぺんを触ってくる動作はまるで小動物のようだ。

「姉貴が縮んだんじゃないか？」

僕は逆に姉貴の頭をポンポンと叩く。

「きーっ！ 弟の癖に生意気ー！」

姉貴は僕の頭を叩こうとジャンプしてくるが、僕はフットワーク良く、それをかわす。背丈の差もあるので、姉貴の攻撃はまったく届かない。僕が大きいのではない。姉貴が小さすぎるのだ。姉貴は高校生や中学生に間違われることがしょっちゅうあるという。背だけではなく、この幼い顔つきや、行動がそういうことに結びつくのだろう。

「晴海。コーヒーはどこだ？」

僕たちのやり取りに父の声が介入してくる。どうやら姉貴に待ちきれなく、自分でお茶でも淹れようとしているらしい。

「ちよつと、待って。私が淹れるからっ！」

姉貴はそう居間に向かって叫ぶと、

「ということで、勝負はお預け。良いわね？」

一時停戦を決めて、姉貴は台所へと走っていった。

居間に行くと父は畳の上に胡坐をかいてリラックスモードだ。やはり長年住み慣れた家は良いものなのだろうか。僕は父から少し離れたところで棚の上を物色していた。そこには家族の写真がそのままになっており、なんだか懐かしみを感じる。

「裕っ！ 運ぶの手伝って！」

台所から指名がかかったので、僕は文句も言わずに姉貴の元へと

向かう。自分に課せられた使命はショートケーキを運ぶことらしい。それにしても、わざわざ甘いものの最上級詞を用意しているとは姉貴も中々できる。

フオークとコーヒーを用意してティータイムの開始だ。

「ほう……………美味いな」

父は姉貴の淹れたコーヒーを褒める。

「でしょ？ マスターのブレンドしたコーヒーを分けてもらったの。裕には分らないかな？」

ミルク入りのコーヒーを飲んでいる僕を馬鹿にしたような目で見ると姉貴にはむかついたが、ケーキに免じてここは敢えて反撃しない。この母ちゃんをどう美味しく食べるかが問題なのだから。

主に父と姉貴の会話によりブレイクタイムは終了する。さてここからが大変だ。僕の引越作業が待っているのだから。

僕と父は荷物の積みである車のほうへと向かった。引越しても、実家には家具もあれば姉貴もいる。なので洗濯機やテレビを運ぶ手間が省けた。しかし僕の衣服や食器だけでも結構な量があるのだ。それらの入ったダンボールを家の中に運んでは、箱を開ける。その作業の繰り返しで時間は刻々と過ぎていった。

すべての作業を終わらせたときには時計の短針が四のところを指していた。作業時間は一時間半ほどだが、結構疲れた。体力があるほうではないのでそう感じたのかもしれない。

「じゃあ、ボクは帰るから。海晴、裕のことをよろしくな」

引越作業からほとんど経っていないというのに、父は僕らに手を振って車へと乗り込んだ。本当はゆっくりしてきたいのだろう。だが明日から仕事の待っている社会人にそれはできないのである。家に着くのは七時過ぎになるのだろうか？ せっかくの休日を僕の引越しに使わせてしまい、少々申し訳なく思う。年末に会う時には肩たたきでもしてやろうと思う。いつも計画倒れに終わるのだが。

「お父さんも気をつけて帰ってね」

姉貴はそう言った。僕も便乗して「ありがとうと」感謝を述べておく。父は一瞬、笑顔を見せ、アクセルを踏んだ。そうすると呆気なく父の顔は視界から消えてしまう。車が曲がり角を曲がるまで見送った後、僕たちは玄関へと向きを変えた。

「さてと、裕。こっちに来なさい」

姉貴はそういうと家の中へと入る。僕はそれに続いた。そして居間にあるテーブル越しに僕は姉貴と対面する。

「じゃあ、これから決まりごとを発表します」

張り切った声で姉貴はそう宣言。別に僕は驚かない。これは僕たちの家では定例行事のようなものだから。家の中でのルールを決め、こうして発表しあう。それは以前から当たり前のように行われていた。

「まず、家事は二人で分担すること」

姉貴はカレンダーを引っ張り出してきて、そこに何やら印を付けていく。

「週末は私が忙しいから、裕がご飯を作ってね」

「分かった」

仕事のスケジュールを僕に教えながら、姉貴は家事分担をしている。社会人対学生ということ、僕に家事の割合が大きくなっているが、それはしょうがない。実家とは言えど、ここは姉貴の家なのだ。居候させてもらう僕にどうこう言う権利はないだろう。

「門限は決めないけど、遅くなるときは連絡すること」

「はい」

「私の部屋には入らないこと」

「はい」

事細かな性格の姉貴だけあって、結構細かいことまで決められてしまった。まあ理不尽なルールもないので極力守るようにしよう。

「で、さっそくなんだけど」

姉貴はメモ用紙にシャープペンを走らせると、僕にそれを渡して

きた。そこには、ジャガイモやらニンジンやらの文字が書いてある。
「今夜はカレーだから、それを買ってきてね」

引越しの準備で疲れているので、嫌な顔が露呈してしまう。しかし、姉貴は言葉巧みに僕を誘導してくる。

「町の様子も見たいでしょ？ 買い物が見に行つてらっしゃい」
言い方自体は柔らかいが、姉貴の内側からは？強制？の二文字を連想させるオーラが出ている。

「わかったよ……」

ここで断れば僕の居候人生は不利になるだろう。大人しく財布と携帯を持って、玄関を出た。

玄関を出ると頼もしげな陽光が僕の顔に掛った。もう夏も終わりに近いと言つてもまだ外は明るい。僕は夕暮れに近い涼しげな空気を楽しみながら、商店街へと足を進めていた。

商店街の店々にとって今の時間は書き入れ時なのだろう。主婦と思われるおばちゃんや、おばさんが真新しい店舗の入り口付近に群がっているのが見える。

この商店街は家から近く、幼いころにもよく遊びに来ていた。だが、僕の覚えている駄菓子屋や、八百屋は既に無くなっていて、その代わりのように人を集めているディスカウトショップなどが目に入った。

この町に来るまで、この時間は止まっていると思っていた。だがそんな僕の意味とは関係なしに、時間は刻々と経過している。移り変わりつつある風景を見て、僕にそんなことを思うのだ。

まあ、哀愁ばかりを浮かべていても、おつかいは終わらない。買い物する店をに目星をつけながら僕は道を歩いていった。

だが足を進めているうちに、僕は商店街から出て、いつの間にか

野道を歩いていた。

方向音痴ではないと思うのだが、引越しの疲れでボーっとしていったからだろう。

踵を返そうと、ボクは振り返る。だが、すぐに向きを変えた。何となくだがこの道を歩かなければもつたない気がしたのだ。幸い、時間にはまだ余裕がある。僕はその道を歩いてみることにした。そう心に決めると、驚くほどスムーズに僕の足は前の道を進んでいった。

町の中では見られない、紅葉やイチヨウ。その道は僕の記憶にある風景そのものだった。確かこの道を一緒に歩いたことがある。

「一緒に、か……………」

心の中の言葉を呟く。誰に言う訳でもない。何となく呟いた、そんな言葉は冷たい空気に混じり消えていく。

道を歩き続けていくと、足が重くなる。まあ、何の不思議もない。僕の目の前の道は登り坂になり始めたのだ。

ここの名称は覚えている。この坂は地元の人に古くから、？キツネ坂？と呼ばれている。名前の由来は、昔この坂でキツネが現れ、人を化かしたというエピソードからきているらしい。そんな話が実在したのかは定かではないのだが、昔から呼ばれている名前を否定する気もない。

そんな坂で僕がすることはただひとつ。この坂を興味が無くなるまで登ることだ。

？あのこと？以来、ここに来るのは初めてだった。ここは本来、来たくない場所なのだろうが僕の足は自然と頂上を目指している。僕はわざと道の端を見ないように路側帯を道路に近いほうを歩いていく。視線は空だけに向けていた。

膝の古傷が痛む。それに伴い、脂汗が出てくる。子供のころは簡単に登れたこの坂も今の僕にはとてつもなく急な斜面に感じられる。それは怪我のせいだけではないのだろうが……………

息を切らしながら、ついに僕は頂上付近まで足を運んだ。あともう少しで？あの風景？が見られると思うと、足取りもなんだか軽くなった。

坂が終わる……………その時だった。僕の目の前に真っ白な霧が出てきたのだ。

こんな時間に霧など出るはずがない。僕は自分の目を疑った。しかし、その霧のようなものは僕の視界を完全に遮る。半ばパニックになりながら、その場で立ち尽くす。前を見ても、後ろを見ても、霧が立ちこめ僕は完全に感覚を失っていた。

「ど、どうなっているんだ……………これ？」

生まれてこの方、こんな体験はした覚えがない。だがこのとき、ある言葉を思い出した。

「？この坂ではキツネが人を化かす？……………そんなはずはない」

未知の恐怖をかき消すかのように僕はそう呟いた。だがその言葉とは裏腹に、僕は焦っていた。第六感というのだろうか。僕は本能でこの事態を恐れているのだ。だが下手に動こうとすれば、もっと悪いことが起こりそうだ。

僕は平衡感覚を保ちながら五感すべてを使い、辺りの様子を探る。そうすると、自分の前方に小さな明かりが見えるのに気づいた。霧に浮かぶその明かりは、ぼんやりとしており、キツネ火という言葉に連想させる。

進むべきか、否か迷う。だが、このままここに居ても、状況は変わらないだろう。僕は意を決して、その方向へと足を進めた。

だが、どんなに歩いても一向に進んでいる気がしない。その明かりは自分の遥か彼方にあるのかまったく近づけないのだ。

「はあはあ……………」

足にも疲れが出始めている。元々、僕は怪我のために長距離を歩くことは医師に固く禁止されている。ついに僕は膝を折り、その場で動けなくなってしまった。

山で遭難してしまう人はこのような感覚を味わうのだろうか？

先が見えない道を歩き、動けなくなり、力尽きる……………

こんな町中で遭難するなんて、どんな事件になるんだろう？

明日の新聞の一面に自分が載ることを想像して、思わず苦笑してしまう。諦めかけた、その時、前方から足音が聞こえてきた。

それは靴で石畳を歩くような、コツコツという軽い音だ。その音は一定感覚で僕へと近づいてきている。

人？ いや、こんな状況で出てくるのは怪物と相場が決まっている。小説やらアニメやらの先入観で、僕は身体を強張らせてしまう。霧は先ほどより濃くなり、自分の鼻先すら見えない状態だった。そんな状況にもかかわらず、足音はまっすぐに自分のほうへと向かっているらしい。

そして、その音は突然消える。だが、その人物が消えたわけではない。僕の目の前で止まったのだ……………

霧越しのシルエットはとても小さい。子供のようにも見える。だが僕は警戒心を解いたりはしなかった。小は大を兼ねる場合もあるのだ。ホラー映画などの場合。

「裕ちゃん……………」

その声に僕は耳を疑った。その透き通るような高い声は聞き覚えがあるのだ。僕がこの声を忘れるはずがない！

だけど……………

霧の先の人物は僕へと手を伸ばす。その手はとても小さく、手首にはカラフルなミサンガが結んであった。

僕はこの手を取って良いのか悩んだ。この手に触れてしまえば、僕の培ってきたものが崩れそうで怖い……………
だけど……………

僕は？彼女？の手を握った。その瞬間、瞬く間に霧が晴れていった。その霧と共に彼女は手を離し消えていく。

「待つて！ 行かないで！」

僕は彼女を捕まえようと懸命に手を伸ばすが、その腕は空を切る。「また会おうね」

その言葉を最期に僕の意識は闇の中へと吸い込まれていった。

夢と思い出

ここは夢の中だろう。僕は直感的にそう思った。

僕の横には幼い少女の姿がある。彼女は僕の手を取り、坂を登っている。落葉で染まった地面は紅い絨毯のように見え、一歩足を踏み出すごとに足裏から感じる木の葉の柔らかさはとても心地良い。この感触は僕がとても大好きなものだった。小さい頃、よく母の制止を聞かずに、落ち葉の海へとダイヴして、その度に怒られたっけ。絨毯の上と一緒に歩きながら彼女は僕に楽しい笑顔を見せ、話しかけてきているらしい。しかし、彼女の言葉は僕の耳には届かない。何を言っているのか分からない。耳を澄ましても何も聞こえないのだ。

ただ風の音だけが僕の耳へと入ってきている。その音は邪魔であると同時に、僕の心を何故か安心させるのだ。

夢ならば……許される。僕はその場に立ち止まった。繋いだ手は彼女の身体すらその場へと留めてくれる。彼女が先に行かないことを確認した後、僕は手を離れた。本当は彼女の手の温もりをまだまだ感じていたかった。けれど、僕はそれ以上にしたいことがあった。確かめたいことがあった。

僕は彼女の顔へと手を伸ばす。赤いリボンをした少女は僕の手を拒む動作を見せない。ただキョトンとした表情で僕の顔を見ているだけだ。

あと数センチで彼女に触れられる——僕の心臓は高鳴る。その鼓動は無音の世界を塗り替えていくように大きく、大きく……

僕の手は最期の数センチを締めようと一気に伸びる。しかし、伸ばした先に彼女の姿は無かった。僕の目に映るのは紅葉した木々と落ち葉の道のみだ。

君はまた、僕を置いていくつもりなのか……そんなのは嫌だ

！ 認めないっ！

「アキッ！」

僕は叫んだ。夢の境目で放ったその言葉は僕の精神を一気に覚醒させた。自分の声で耳が痛い。それ以上に痛かった——心が。

「はあはあはあ……………」

肩で息をしながら、僕は周りの様子を見る。ここはどうやらどこかの和室のようだ。

先ほどから場面が変わりすぎて頭の回転が付いていかない。ここが現実であるか夢であるかすら区別ができていない。

とりあえず身体を起こしてみると、頭の上から何か落ちた。正確にはおでこからだろ。物体は濡れたタオルであつた。まだひんやりしていることから見て、乗せられてから殆ど時間は経ってないのだろう。

どうやら僕は看病されているらしい。緩められた衣服や濡れタオルからすぐに自分の置かれた状況を理解できた。ということは誰かがここに運んでくれたのだろうか。

と言うと、やはり先ほどの出来事は夢なのだ。先ほどの怪奇現象を思い出し、僕はそう考えるのだ。夢ならば誰が出てきてもおかしくはない。それがもうこの世に存在しない人でも……………頭では夢だと十分に理解している。なのに何故、こんなにも心が痛いのだろうか？

その時、部屋の外から足音がした。ずいぶん前からその音は聞こえてきたのだが、呆けていた僕には唐突の出来事に思えたのだ。障子が開き、僕の目に飛び込んできたのは、紅白の衣装を纏った少女の姿であつた。その服装からして、その子が巫女であることは理解できた。

「大丈夫？ 何かあったの？」

その子は僕のそばへと駆け寄り、チョココンと僕の目の前に座った。目線が同じになると、小柄な印象を受ける可愛い子だ。年は僕と同じぐらいだろうか。

「えっと、僕はどうしてここに？」

彼女の様子を伺いながら、今の状況を確認してみる。

「おじいちゃんが散歩中、あなたが倒れているのを見つけたの」

「僕、倒れてたんだ……………」

他人事のように僕は呟く。自分では何が起ったのか何も分からないし、身体に異常も感じられない。ただ時間だけが抜けてしまったような、奇妙な感覚なのだ。

「本当に大丈夫？ 怪我とか気分とか」

彼女は心配そうに僕のことを見つめてくる。献身的な看病を受けて看護師さんに惚れてしまう人が多いそうだが、僕の場合もそれなのだろうか？ こんなに心配してくれる彼女のことを、つい可愛いと思ってしまった。いや、元々彼女は可愛らしいのだが。

「大丈夫……………です。たぶん」

照れ隠しのように、僕は両手を動かし彼女に元気なことをアピールする。

「良かった。じゃあ、おじいちゃん呼んでくるね」

そう言って彼女は立ち上がった。

「あと、顔。拭いておいた方がいいよ」

「えっ？」

彼女にそう言われて気が付いた。僕の目からはいつの間にか涙が零れていた。

その後、しばらく部屋には僕だけの時間が流れた。身体は何ともないのに、頭はボーっとしている。何か考えていたほうが楽そうだが、この状況で思考することを僕の脳は拒否しているらしい。だから

ら僕はすでに日が落ちかけている外へと目をやるだけであつた。

大した時間も置かずに状況は変わった。？おじいちゃん？と呼ばれる人物が部屋へと入ってきたのだ。おじいちゃんと呼ぶには抵抗がある、そのイカツイ面持ちを前に僕は委縮してしまう。まあ、さすがにいきなり胸倉を掴まれたり、刃物を突きつけられたりはしないだろうが。

「大丈夫かね？」

「はい。大丈夫です」

質問にはとりあえず笑顔で答える。ギクシャクはしているだろうが。そんな僕の態度に対して彼はなぜか嬉しそうな顔をしている。それは気のせいであろうか？

「君が倒れていたんで、心配したぞ」

「はあ、すいません……………」

今更ながら、道端で倒れていたことを恥ずかしく思う。

「いやあ、この歳で君みたいな人をおんぶする事になるとは思わなかったよ」

「ごめんなさい」

彼は僕の数倍の年齢だ。いくら僕が小柄なほうだとしても足腰の負担になっただろう。とてもやるせない気持ちになる。

「気にするな」

おじいさんは僕の気持ちと対照的に豪快に笑う。その笑い方になぜか懐かしいものを感じた。それだけではない。僕はこのおじいさんのことを知っている気がする……………そんなことを思い始めたのだ。

「裕君も大きくなったものだな」

「えっ？」

自分の名前を呼ばれ僕は思わず声を上げてしまった。やはり、彼も僕のことを覚えているのだ。

「えっと……………」

「ほら、飴をなめるか？」

彼は僕に掌に乗った、小さなベッコウ飴を差し出す。ここで僕の記憶はまるでフラッシュバックするように蘇った。

「神社のおじさん？」

「そうだ。思い出してくれたか」

そうだ。彼が神主の格好をしていなかったから気が付かなかった。僕は小さい頃から、このおじさんを知っている。何故ならこの神社の境内は僕たちの遊び場だったから。

「それにしても裕君が帰って来ていたなんて思わなかったよ」

「今日帰ってきました」

そうか、そうかと彼は頷く。

それからおじさんと世間話をする。年齢差があるということの話が弾む訳ではない、それでも会話は楽しかった。懐かしさが僕にそう思わせたのだろう。

おじさんは僕の身体を心配してか、「泊まっていきなさい」と言ってくれたけど、僕はそれを丁重に断った。さすがにそこまで世話になるのは僕の良心が許してくれない。

少し経っておじさんは腰を上げ、僕の元から去る。どうやら夕方の仕事の用意があるらしい。僕は軽く会釈をし、彼を見送った。

それから少し考えた。疑問に思うこともあるのだ。普通、人が倒れていたら救急車でも呼ぶものなのだろうが何故、おじさんは僕をここに運んでくれたのだろうか。

「まあ、いいか……」

そんなのは大した問題ではない。身体どこにも異常があると感じないし。頭の方も正常に機能してきた。そうだ。そろそろ帰らないと姉貴にも心配をかけてしまいそうだ。

そんなことを考え、木造の廊下を歩いて行くと僕の目に見覚えのある白い庭が見えてくる。僕の予想通り、ここは神社の境内の一角の屋敷だった。

僕はこの場所には良く遊びに来ていた。ここはキツネ坂からほど近い神社で、この境内は子供の遊び場として最適であったからだ。広さもあり車も来ない。そして僕たちの秘密の場所だったから。

ここは変わっていない。春にたくさんの桜を咲かす大きな木も、境内の脇に敷き詰められた白い石も、あの時から時間が止まったように思い出そのものの姿だった。

そんな思い出の風景に巫女服姿の少女が登場した。彼女は箒を持って地面に溜まった落ち葉を掃いている。

「あつ、起きたんだ」

彼女は僕に気が付くと、掃除を止め、近寄ってくる。その足取りはさすが巫女というか、優雅であった。

彼女はそんな優雅な足取りで僕の周りを三百六十度回り、身体の隅々を穴の開くほど見てくる。

「あの……………なんですか？」

「うん、大丈夫そうだね」

そう言っただけで彼女は僕から一歩半ほど離れる。

なんなんだろう、さっきの行動は……………彼女みたいな可愛い子に全身を見定められるのは少し歯がゆい。

「うーん。津谷くんも背が伸びたよね？」

「えっ？」

彼女は僕の頭のとっぺんに視線を送りながらそう言う。

僕は自分の記憶を思い起こす。僕にこんなカワイイ知り合いは居ただろうか？

「あつ、その顔、私のこと分らない？」

彼女は少し膨れた顔を見せる。その仕草すらかなり可愛い。

「えっと……………」

僕は困ってしまっってしまう。記憶をひっくり返し彼女の顔を合致させようと頭をフル回転だ。だが数年前の顔は全員幼くて、僕は答えを見つけられそうもない。

「あーあ。がっかりだなあ」

「ご、ごめん……………」

彼女の肩を落とす仕草を見て、僕は慌てて言葉を並べる。こんなに焦っているのはいつぶりだろうか。

「なんて冗談だよ。久しぶりだし、仕方が無いよね」

彼女はクスリと笑い、顔をあげる。その顔には落胆の色は無い。有るのは、僕をからかってやったぞという、悪戯っぽい笑みだけ。笑った時に顎に手を当てる仕草を僕は覚えている。その仕草が僕に彼女が誰だかを教えてくれた。

「沙理奈……？」

「あつ、やつと思い出してくれた」

なんてことだ——彼女は小学校で一緒だった、青原 沙理奈だ。沙理奈は僕の数少ない友人だった。

そんな彼女をなぜ僕が気付かなかったかというと、小学校の時の彼女はいつも眼鏡を掛けていて、オドオドしていて地味な印象を受けていたからだ。そんな過去の彼女と比べると、今僕の目の前にいる少女はとても華やかだった。

「沙理奈、久しぶり！ 全然、分からなかったよ」

「あつ、そつか。あのときは眼鏡だったんだよね」

彼女は自分の顔を擦りながらそう言う。おそらく今はコンタクトレンズを装着しているのだろう。

「津谷君は雰囲気とか全然変わらないよね」

彼女の言葉は褒めてもらったと思っていいるのだろうか。それとも変わっていないことを馬鹿にされたのだろうか。どちらの意味か分からず、僕は誤魔化すように笑った。

それから世間話タイムだ。懐かしさのあまり会話は弾みに弾む。しかし、それ束の間のこと。おじさんが僕の前へと現れた。今度の恰好は住職の恰好だった。

「裕君。そろそろ帰らなくてもいいのかな？」

その言葉に空を見上げる。気が付けば、空はもう赤を越して、黒ずんできている。

「あつ、はい。そうですね」

「私が送っていい」

そう言つと、おじさんは神社の階段を下りていった。本音を言えば、もう少し沙理奈と話をしていたかったのだが、姉貴やおじさんを待たせるわけにもいけないし、僕は沙理奈へと別れの挨拶をする。

「じゃあ、沙理奈。また遊びにくるよ」

「うん。またね」

彼女は笑顔を見せ、僕に手を振る。彼女の言つた「またね」がいつになるかは分からないが、きっとまた会えるのだらう。こんな狭い町だし。悲観などせずに僕は車へと乗り込んだ。

「ありがとうございました」

しばらく車に揺られたところで車はエンジンの音を静めた。さすがはおじさんだ。僕の家場所が分かっている。一言も案内をしていないというのに、僕は家へと到着している。お礼を言つて、自分の家の前で車を降りた。

おじさんはその様子を見て、満足げな笑顔を見せ、車を走らせていった。降りかけに放たれた、「いつでも遊びにおいで」という言葉がとても心を温めてくれた。もう子供ではないというのに。優しい言葉をかけられるのにはどうも弱い。

さてと、色々あつたが無事家に到着した。後はゆっくりと部屋で寛ぐ。身体はかなりの疲れを感じているのだから。

僕は家のドアを開けた。玄関先には小さな鬼が……………

「裕一っ！　いつまで買い物に行ってるの！　それに頼んだものは？」

「あつ！」

僕は夕飯の材料を買うのをすっかり忘れていたのだ。

「裕！ どうしてくれるのよ。冷蔵庫の中は空っぽなのよ！」

「ああ、ごめん。姉貴……………」

僕はひたすら平謝りだ。怒ったときの姉貴は迫力が普段の数倍になる。身体はちっちゃいくせに、怒ると怖いんだよなあ……………

「えっとね……………」

僕は仕方ないので今までであった出来事を正直に話す。自分が倒れてしまった話など、恥ずかしくてしたくはなかったけど……………プライド以上に命が大切だ。

「裕っ。大丈夫なの？」

「あつ、うん」

姉貴は一気に表情を？お姉ちゃん？に変える。

「本当なの？ どこか痛かったりとかしない？」

「大丈夫だって！」

肩をガシツと掴む腕の力は痛いほど強かった。姉貴はしばらく僕の様子を確認する。そしてなんともなかったことを確かめるとやつと僕を放してくれた。

「今日の夕飯は出前にするから、裕は部屋で休んでいて」

その言葉に僕は素直に従う。というのは姉貴の心配そうな顔を直視しているのが照れくさかったからだ。僕が以前入院していた頃も、姉貴は毎日のように見舞いに来て僕の話し相手になってくれた。あれから何年も経っているというのに、姉貴にとって僕はまだまだ手のかかる弟なのだろう。いつか一人前になった時は姉貴にそのことも含めて感謝を述べたいと思っている。今は無理だけど。

夕食は姉貴が言った通り出前になり、僕はかつ丼を頂いた。お腹

一杯になった僕はそのまま部屋に戻り、ベッドに寝転ぶ。

そこでやっと頭の整理をする気になった。今日の出来事は本当になんだったのだろうか。

夢……………そう言ってしまうえば、簡単に片付いてしまうだろう。

でも――

「夢……………じゃなければいいな……………」

そう僕は呟いた。

あの時、居たのはまさしく？彼女？だ。

ここに帰ってきたのは、決着を着けるためだったのに……………僕はまだ？あのこと？に縛られているのだろうか？

その時、自分の襟首に何かがあることに気が付いた。それは紅い葉っぱだった。何の木のものかは分からないが、倒れたときにそのまま付いてきたのだろう。

一片の葉を指に挟み、見上げる。その葉を通して見た部屋の電気の光はまるで夕日のように紅く見える。その光はあの坂の景色を連想させる。

そういえば、今日は坂からの風景を見れなかったんだっけ。

「明日も行ってみようかな……………」

そう僕は思い、ダルい身体をベッドへと深く沈めた。

新たな日 新たな場所

鳥の声が耳に届く。その音はいつもよりも遥かに大きい。そんな騒ぎ声で僕は半ば強制的に覚醒させられる。時計を見ると五時四十分………何分かだ。

とにかく僕が言えるのは、まだ眠い。二度寝しようということだ。そしてあっさりと目を閉じた。だが、壁越しに何か忙しそうに動く足音が僕の睡眠を邪魔する。

母さんにしては、なにか、すばしっこい感じだ。そこで僕はやっと思い出した。ここは東京のマンションの一室ではない。昨日、実家に帰ってきていたことをすっかり忘れていた。

身体を起こすと、昨日開けられなかった沢山のダンボールで埋め尽くされた部屋が目に入る。起きがけに見る散らかった部屋は決していいものではないな。今日はこいつらを片してやらないと。

「そして——この足音は姉貴か」

朝早いというのに、何をやっているんだろうか？ 僕はベッドから立ち上がり、部屋のドアを開けた。

僕の部屋は一階にあり、すぐそばにダイニングキッチンがある。そこに姉貴がいた。素早いフットワークで何かをしている。そのチヨコマカさは小動物を連想させる。リス………それとも、ネズミか………
「あつ、裕。早いわね」

姉貴は僕の姿に気が付くと、挨拶をする。しかし、その動きを止めることはしない。

フライパンで何かを炒めながら、皿を片手で用意する。仕事の仕事だけあって、その手際はものすごく良い。この感じだと、朝からそうとう豪華なものを期待できそうだ。テーブルの上には既に数々のおかずが並んでいる。

「お昼の分も作っておいたから」

なるほど。姉貴は今日も仕事があるのだ。これは僕に対しての配慮なのだろう。うむ。良くできた姉だ。

働き者の姉貴見ていると、さすがに何かを手伝わなくてはいいけないという気にもなる。

「姉貴、なにか手伝おうか？」

僕は珍しく自分からお手伝い宣言をした。しかし――

「じゃあ、後ろから応援して」

「はい？」

「だから、お・う・え・ん！」

姉貴はまじめでしっかり者なのだが、たまにこういう訳の分からないことを言い出すことがある。天然ってやつなのだろうか？ まあ、僕に手伝ってもらいたいことはないようだ。僕はせめて邪魔にならないように、洗面所に行き、顔を洗ってくることにした。

鏡に映る自分は、冴えない顔をしている。おまけに寝癖も酷い。

昨日ちゃんと乾かして寝なかったせいだろう。今日はちゃんと荷物を整理してドライヤーなども探さないと……………

水を手に取り、ぺたぺたと髪につける。そして、髪の設定に満足したところで、僕は洗面所を後にした。

僕がダイニングに出て行ったときには机の上に数々のおかずが並んでいた。先ほどよりもその数は多くなっている。

「さあ、少し早いけど、朝ごはんにしましょう」

姉貴はそう言う僕をテーブルに着かせた。昨日はそんなに不思議に感じなかったがこうして二人で向かい合って食事するのは久しぶりだ。

「なによ、裕？ 見つめちゃって」

「いや、なんでもないよ」

不思議そうに顔を上げてきた姉貴の表情に僕はつい俯いてしまう。

「もしかして、私に見とれちゃった？」

「それはない」

そこは弟としてきつぱりと否定する。

「もう素直じゃないんだから」

クスクスと笑いながら、姉貴は食事を続けた。

「ごちそうさまでした」

僕は手を合わせて、食事を終える。

「おそまつさまでした」

姉貴も僕の仕草を真似して、手を合わせる。久しぶりの姉貴の料理は美味しかった。半熟のベーコン入り目玉焼きや、シナモントースト、他のおかずにも手をつけたが、どれもこれもが美味しい。さすが毎日料理をしているだけある。

「じゃあ、お昼はレンジで温めて適当に食べてね」

「うん」

僕に昼ごはんの説明をしてから姉貴は食事の片づけを始める。

「姉貴、仕事あるんだろ？ 僕がやっておくよ」

「あつ、そっか。お願いするわね」

まるで僕が居ることをやっと思ひ出したようにそんな台詞を言った。家事分担制を自分の口から言ったのは昨日だというのに………
…長年の一人暮らしの要領が身に染み付いてしまっているのだろうか？ 僕も甘えすぎないように頑張らないと。

テーブルを片付けながら、僕はそんなことを思った。

まずは汚れた食器を流しに押し込むと、それを順々に洗っていく。皿洗いなどは今まででもしてきたことだ。僕は難なくこなしていく。皿洗いとテーブルの上の片づけが終わったところで、姉貴がダイニングへと顔を出す。

先ほどの服装とは違い、外出用のカジュアルな服装をしている。その顔には薄く化粧をしているらしい。少し大人っぽい外見になっている。

そんな化粧などしなくても、スッピンでまだまだいけると思う。

声を大にしてそんなことを言いたいのだが、本人が大人っぽく見せたいらしいので、敢えて黙っておく。

「じゃあ、裕。お姉ちゃん、行ってくるわね」

「ああ」

「お昼ご飯ちゃんと食べるのよ、それから——」

「子供じゃないんだから、大丈夫だって」

次から次に言葉を発する姉貴を玄関先から押し出すようにして僕は彼女を見送った。

「さて、僕もそろそろ始めないとな」

僕もダラダラしていられないのだ。今日は学校に転入の手続きをしにいかなくてはならない。そして姉貴が仕事ということで、夕飯も僕が作ることになる。

逆算して考えると、そこまで遊んではいけないのだ。それに昨日見られなかった風景も見たいと思っっているし。

様々な思考を浮かべながら家事を済ましている間に、時間はどんどん過ぎていく。時計を見ると十時過ぎ。そろそろ学校に行く約束の時間だ。

僕が転入することになったのは公立の白狐高校というところだ。偏差値的には結構高く、この辺りでは一番の進学校となっている。とは言っても、僕が東京で通っていた学校のほうが格上で転入試験などは楽々パスできた。

僕がこの高校を選んだ理由は、ある程度学力が高いという事と、家から一番近い学校であるからだ。徒歩二十分という距離は、都会の満員電車通学を味わってきた僕にとって天国のように思えてくる。それにしても子供の頃から見慣れた学校に、まさか転入で入れるは思わなかった。僕のワガママを聞いてくれた父や母には感謝をしたい。

僕は必要書類などを確認し、家を出た。もちろん、姉貴に渡され

た合鍵で戸締りをすることも忘れていない。

外は今日も快晴だ。見知った道をしばらく行くと、校門が見えてきた。門の脇には県立白狐高校と書いてあるプレートが掛かっている。目的地はここで間違いない。外来者用の門を通り、敷地内に入っていく。

こんな時間に私服で高校に行くのは少し勇気がある。生徒にでも見つければ不審者扱いされて視線を受けることになる。だが、書類を出すというミッションがあるし、逃げるわけにはいかない。ここは堪えるしかないのだ。

だけど、やっぱり人目は気になる。僕は潜入ゲームのように半ば、身を潜めながら、僕は校内を進んで行った。

僕の心配は杞憂に終わり、校内では誰にも会わなかった。校長室と職員室に寄り、必要書類を渡すと、晴れて僕はこの学校へと転入を認められたのだ。

校門を出て、僕は振り返った。明日からここが僕の学び舎になるのだ。春でもないのに心がざわついているのが分かる。好奇心、そして不安。どちらも波紋となり僕の心を揺れ動かしている。こんな気持ちを感じたのは、随分久しいものだった。

運命の悪戯 ― 再会 ―

家に戻り、昼食を食べたあと、僕は家の中でダラダラと休憩を取っていた。今日の一大イベントをクリアして気が抜けてしまったのだろう。

本当は今すぐにでも、あの坂に行きたいところだった。

でも、あの場所では夕陽を見なくてはいけない気がするのだ。何となくだが。

そうなれば時間を潰さなければいけない。なら何をすればいいのか……………僕の視線の先には特に何も無い部屋が飛び込んできた。

「うん。掃除をしよう」

というわけで、僕は家の掃除をことにした。部屋の水拭きから、おまけの水周りの掃除まで。特に綺麗好きというわけではないのだが、これから住む家なのだし、やって損はないだろう。

姉貴は仕事があるので、細かい掃除はめったに出来ないらしい。表面上は綺麗に取り繕っているが、隅には埃の山が出来ている。その事実が昨日のうちに見過した。

僕は腕まくりをし、掃除道具を友として埃の殲滅を開始した。

掃除というのは不思議なもので、やり始めると止まらない。気が付いた時には四時半を回っていた。そろそろ丁度いい頃合いだろう。綺麗になった部屋を見回し、満足感と共に僕は家を出るのであった。日の入りまではあと一時間以上もある。ゆっくりと歩いていく。また倒れたら恰好悪いし。

坂道は昨日と同じで穏やかであった。紅葉している木々も、微かに聞こえる風の音も変わらない。巣に帰る鳥の声を聞きながらゆっ

くりと坂を歩く。

昨日とは違い、今日は特に疲れを感じない。僕は快調に足を進め、ついに頂上付近へと辿り着いた。

ここは峠道の頂上だ。僕の記憶が正しければ、小さな展望広場があり、そこから街を一望できたはずだ。

記憶通り、僕の目線の先には広場がある。不思議な達成感を感じながら、僕はその広場へと近づく。だけど、そこには僕以外の人が居た。人物の特徴より先にその服装が目に見え込んでくる。

ブルーのチェックスカート、それに合わせるかのような青のワイシャツ。正面を向けばネクタイがついていることも分かるだろう。その制服を僕は見たことがあった。ついさっき訪れた白狐高校の制服だ。

時間的には高校生が下校しても変ではないのだが、彼女みたいな子が一人で居ることは珍しいと思う。この景色はいいとしても、ここには木で作られた簡易的な腰掛しかない。遊び盛りの高校生が来る様な場所ではないのだ。

風は彼女のスカートと長い髪を揺らす。その風なびく黒の髪は何故か？あの子？を連想させる。

でもそんなはずはない……………彼女はもういないのだから。

彼女は街を眺めているようでそこから動かない。僕はここに居るべきか迷ったが意を決して歩み始める。僕にだってここに用事があるのだから。

数歩進んだところで、彼女が動く。落ち葉を踏んだ音で彼女は僕に気が付いたようだ。ゆっくりと僕のほうを向いた。

「っ！」

彼女の顔を見て、僕は言葉を失った。

彼女は似ているのだ――

いや、そんなはずはない！

僕はその場に立ち尽くし、彼女の顔を眺めるしかなかった。赤の他人にそんな行動をすれば変人に思われるかもしれない。自分で思うほど彼女を凝視していた。それしかできなかった。

しかし彼女もそんな僕を不審な目で見ることはしなかった。

二人の間に静かな時間が流れる。風の音さえ聞こえそうな永遠の一瞬だった。

「裕さん……………」

彼女の声で僕は我を取り戻す。そしてその言葉が意味することを知った。彼女は僕のことを知っているのだ。どこかで会ったのだろうか？

いや、そんなことはどうでも良い。やはり彼女は？あの子？ではなかったのだから。

彼女は僕を？裕ちゃん？と呼んでいた。

？呼び方？。そんな些細な違いでも、僕にとってはまったく別の人物である証拠なのだ。

彼女は僕の逢いたい人物ではなかった――

そんなことは分かっていた。

分かっていたはずなのに僕の心の中には、何か苛立ちにも似た感情が芽生えたのだ。その感情を押し殺し、僕はその場を取り繕う。

「えっと……………」

僕が言葉に詰まる中、彼女は少しずつ僕へと近づいてくる。何故かその場から逃げ出したい気持ちにもなっていた。そんな気持ちも知らずに彼女は近づいてくる。

その顔がはつきりするたびに似ていると思ってしまう。そんな思考を消すことはとても苦痛だ。まるで消しゴムで心を削るかのように見える。

「えっと、裕さんですよ？ 私を覚えてますか？」

そんなこといきなり言われても困る。彼女に似た人物ならば知っているが、その子は死んでいるのだ。五年前に……………

「あつ、えっと、ごめんなさい……………」

彼女の足は僕から少し離れたところで止まる。謝罪を口にしたのは僕が悲痛な表情を取ったからだだろうか。それでも彼女の口は止まらない。

「亜季の妹のです。坂上、亜矢です」

そこで僕はやっと理解した。？あの子？には妹が居たことを思い出した。

何故そんな大事な事を忘れていたのかは分からない。けどはつきりしたことがある。

目の前の少女はやはり？あの子？ではないのだ。亜季はもう居ないのだ。

「裕……………さん？」

「えっ？」

頬に何か生温かい流れを感じた。指ですくってみると、それが何であるのか分かった。

僕は泣いていた。その自然と流れ落ちる涙に視界はぼやけていく。「あれ？　なんで泣いてるんだろ？」

目を擦っても涙は止まらない。この涙はどこから来るのだろうか？「ご、ごめん。ちょっと」

僕は彼女に背を向け、涙を止めようと必死に努力する。しかし涙

は止まる気配を見せない。恥ずかしさあまり、この場から一目散に逃げ出したいと思った。

ふいに背中になにか柔らかいものが触れる。それが彼女の掌だとすぐに理解した。

彼女は両手を背中に付け、身体を寄せてきたのだ。その背中越しの暖かさに、僕の涙も不思議とだんだんと収まった。この温もり………懐かしい。

しばらくそうした後、僕は彼女からゆっくりと離れた。温もりを失った背中は一瞬に寒くなる。その温度差は僕に平常心を取り戻させた。感情が収まってくると急に恥ずかしくなってくる。それは彼女も同じようだ。俯いている顔は真っ赤に見える。それは夕陽の赤さのせいではないだろう。

「ごめんね。僕………」

「い、いえ。私こそ………」

気まずい沈黙が流れている。僕はその状況を打開すべく、彼女に会話を試みた。

「亜矢ちゃん。僕、覚えてるよ」

と、口では言ってみたものだが、僕の記憶の中にほとんど彼女の姿はない。おぼろげに思い出せることと言えば、僕と亜季が楽しそうに遊んでいる後ろで見守っている幼い亜矢ちゃんの姿だけだ。

「えっと、裕さん。この町にはなんでいらっしゃったのですか？」

「ああ、昨日から引越して来たんだ」

「えっ！」

彼女は驚きを顔に表す。それとともに嬉しそうな顔を見せた。

「そうなんですか。よかった………」

彼女が見せる初めての笑顔はやっぱり亜季とそっくりだった。そんな笑顔を見ると何か心の奥に引っかかりのようなものを感じてしまう。

「あつ、そうだ。いつしよに景色を見ませんか？」

彼女は僕の手を取り、展望広場の方へと引つ張る。

「あつ、ちよつと……」

半ば強引に腕を掴まれ、僕はその場を後にする。

峠の展望広場。ここからは街一面が見下ろせる、ここは？僕たち？の秘密の場所だった。

特に夕暮れ時の眺めは最高だった。すべてのものが紅く染まり、まるで赤い海の中に沈んでいる街のように見えるのだ。

だがそれは僕の記憶の中の話だ。今、僕の目に飛び込んできたものは、全く異なる景色であつた。

町の中央には建設中のビルの姿が見える。海から突き出る長いコンクリートの塊は何か不協和音のような嫌悪感を募らせる。

「綺麗ですよね」

もしかして隣にいる彼女と僕は、違う景色を見ているのだろうか？

こんな景色を僕は綺麗とは言えない。ここに亜季が居れば彼女も僕と同じことを考えてくれるだろう……

「私、ここが大好きなんです」

僕の気持ちも知らずに彼女は嬉しそうに語り出す。

僕はそんな彼女の言葉を半ば聞き流し、目の前に広がる景色を眺めていた。

「そろそろ帰るね。じゃあ、また――」

しばらく景色を睨んだ後、僕は彼女に軽く挨拶をし、その場を後にしようとする。

「あつ、裕さん………あの」

「ん？」

「その、一緒に帰っちゃダメですか？」

彼女は真つ直ぐな目で僕の顔を見てくる。そんな表情をされては断るわけにはいかないじゃないか。

というよりもよくよく考えてみれば彼女は女だ。こんな時間に一人で出歩いていたら、どんな危険があるか分からない。

「うん。行こうか」

そう告げ、僕と彼女はその後にした。

大した会話もなく坂を下り、商店街へとたどり着く僕ら。ここまで来ればもう危険は無いだろう。

「そうだ、僕、買い物しなくちゃいけないんだ」

「あつ、手伝いましょうか？」

「えつ、悪いよ、そんな……」

「でも、安いお店知っていますよ」

早く別れたいと出した言葉は、思わない方向へと話を発展させてしまった。

この話題は彼女の得意領域らしい。僕が話さずとも話題は膨らんでいく。

面倒だと思う一方で、ある別の考えが浮かんできた。それは最大限に彼女を利用してやろうというものだった。

ここに来てから商店街のお店の値比べをしたことはない。親から仕送りされている状態なので、食費をケチればそれに越したことはない。姉貴も大層喜ぶだろう。そんなことを計算し、彼女に連れられ商店街の店を巡ることにした。

言うだけあって亜矢ちゃんのアドバイスは的確で、僕は二、三割安い値段で野菜を買うことができた。他にも自分ひとりでは入らないであろう隠れた名店を発見できたのだ。

時間と手間はかかったが、それなりの収穫を手にし、僕は帰路に着いていた。その隣には当たり前のように彼女の姿もある。

亜矢ちゃんは他愛のない会話を僕へと振ってくる。でも何か無理している感じもする。まるで沈黙を嫌うような感じだ。本当は年上の僕が会話を引っ張らなければいけないのだろうが、そんな気分ではない。少なくとも今は。

「じゃあ、私の家はここなので」

突然彼女は立ち止る。そこは僕の家に近い見覚えのある家であった。

「ああ……………」

見慣れた家の前にいる亜矢ちゃんの姿を見ると、彼女が亜季の妹だと再認識させられる。

「じゃあ裕さん。また」

「うん。じゃあね」

僕は手を振る彼女に見送られながら、その場を後にした。ひとりになると右手に持った買物袋がやけに重く感じた。

ボーっとして夕飯を作っただけにあって、その日のディナーはみごと失敗した。お皿は割るわ、フライパンは焦がすわ、酷いものだった。これは姉貴に叱られることを覚悟しておこう。そして僕の予想通り、家事全般にダメ出しをされる僕であった。掃除でマイナスを相殺していなかったら危ないところだった。

「で、裕。今日、何かあったでしょ？」

「えっ？」

僕を散々へこませた後に姉貴は唐突に聞いてくる。

「顔に書いてあるわよ。嫌な出来事がありましたって」

「別に嫌なことではないけど……………」

そうだ。僕は亜矢ちゃんに会って、ちょっと変わった景色を見ただけなのだ。それ以外は何の変哲もない一日だったのだ。なのに、どうしてこんな気持ちになっているのだろう？

「姉貴。亜季に妹がいるのって知ってた？」

「うん。亜矢ちゃんでしょ」

「そりゃそうだよ……」

姉貴はずっとここに住んでいるのだ。それは亜矢ちゃんのことも知っているだろう。ご近所さんだし。

「そっか。亜矢ちゃんに会ったのね」

「うん………」

「亜季ちゃんに似ているわよね。彼女」

「そうだね………」

僕はそんな空返事をする。そんな僕の態度に姉貴はため息を付いた。そして僕の方へと詰め寄ってくる。

「てえい！」

「痛っ？」

僕のスネにはローキックが突き刺さった。その痛み思わず声が出してしまった。

「なんだよ。姉貴！」

姉貴は睨みつける僕を指さすと、

「あんたが何を思っているか知らないけど、亜矢ちゃんは亜矢ちゃんなんだからね！」

「はあ？」

「まあ元気になれってこと！」

そう言っ、お風呂場に消えていった。

「たくっ、何なんだよ………」

疑問を抱く僕にはジンジンするスネの痛みが残っていた。

初登校と偶然

気だるい朝を迎える僕。新しいスタートの日がこんな気分では萎える。だが、いきなり学校をサボるわけにもいけないので、ベッドから渋々身体を起こす。

こんな冴えない気分を流すべく、僕は洗面所へと向かった。鏡越しに映る顔はいつもよりも冴えない。昨日眠れなかったせいか、目の下にうつすらとクマが見える。いくら顔を水で擦ったところで黒いラインは消えてくれない。まったく……

クマを長い落とせる洗顔料があればいいのに……発明した人がいたとすれば、その人は将来遊んで暮らせるのであろう。そんな夢想をしながら普通の洗顔料で顔を洗い、タオルで顔を拭く。家とは違う洗剤のせいか、そのタオルからはいい匂いがした。おそらくは高い洗剤でも使っているのだろう。こういう所に金をかけるのがいかにも姉貴らしい。

洗顔を済ませ、ダイニングへと移動すると、僕の鼻は香ばしい、いい匂いを嗅ぎつけた。姉貴はいつもと同じように忙しそうに台所を走り回っている。テーブルの上には2つのお弁当箱が乗っていて、そのうちのひとつはおそらく僕の物だろう。

当然高校に行くのだから、お昼御飯は必須だ。手間をかけたくないという理由で買い食いを希望したのだが、姉貴はそんな僕の意見に断固反対した。

姉貴いわく、栄養をしつかりと取らないと、ちゃんと成長しないということなのだ——そう言っている本人の背が低いのだから説得力など微塵もない。

まあお弁当を作ってくれるというなら、それを断る理由はない。経済的にも正直言っておりがたい。そう言う理由で僕のお弁当生活は幕を開けるのだった。

朝ごはんを食べ、僕は部屋に戻り、着替えをする。袖を通すは新しいワイシャツとズボンだ。チエック柄のネクタイを着ける。前の学校が学ランだっただけに、ネクタイの着け心地は少々落ち着かない。だがキュッと閉めると、こう、気持ちまで引き締まる感じがする。これが服装の魔法というものなのだろう。寝起きの憂鬱も吹き飛んでしまった。

姿見で格好を確認すると、僕は荷物を持ち部屋を出る。

「じゃあ、姉貴。行ってきます」

「うん。いつてらっしゃい」

ダイニングにいた姉貴と軽く挨拶を交わし、僕は家の外へと飛び出した。

家の前から見上げる空は今日も快晴だった。そんな天気の後押しされるように僕は勢い良く路地へと出る。

「おはよう」

「うおっ！」

飛び出したのは僕だけではなかった。路地の影からは僕を待ち受けていたかのように沙理奈が飛び出して来たのだ。

「紗理奈！」

「おはよう、裕くん」

彼女は僕の驚いた表情を楽しむかのように悪戯に笑う。

「で、何でこんな所にいるの？」

「いっしょに学校行こうと思って」

良く見れば、彼女も白狐高校の制服を身に付けている。

ということは僕の家は彼女の通学路になる。つまり毎朝先ほどのような待ち伏せ攻撃を受ける可能性があるのだ。明日からは少しは用心しなければ……………

「じゃあ、行こうか」

困惑する僕の前を彼女は歩きだす。それに釣られるかのように、僕も足を進めるのであった。

沙理奈は僕の一步先を歩き、どうでもいいような内容の会話を僕に振ってくる。昨日の夜ごはんや、今日の朝ごはん、そして今日のお昼のことだ。

なぜ彼女がそこまで食べ物話題ばかり出すのかは分からないが、とりあえず一人寂しく登校せずに済んでいる。

小さい頃は僕らの後ろが定位置だった彼女が、今は僕の前で笑っている。沙理奈は本当に変わったのだと思う。明るくなったし、その――可愛くもなったし。

そんな彼女を目の前に、何も変われてない自分が少し情けなかった。

「というよりも、裕くん。そのタイプン……………」

そう言われ自分のタイプンを見る。それは彼女とは違う色をしていた。僕のは青色しているのに、彼女の付けているのは赤色だ。

「もしかして、これって学年で色が違うの？」

「うん。1年生は青なんだよね」

早速、バレたようだ。何を隠そう、僕は高校受験で浪人をしていくのだ。とはいってもただ単に頭が悪かったわけではない。怪我の具合がおもしろくなく、体調の関係で足止めを受けたのだ。だからこそ別に恥ずかしいことではないと自分では思っている。そもそも浪人自体、別に恥ずかしいことでもないし。

「そっか。裕くんが後輩ってなんか変な感じするね」

「僕も同じだよ。小学生時代の友達が先輩なんて」

「まあ、いいんじゃない？」

沙理奈は笑ってそんなことを言ってくれる。彼女にとって学年の違いなどあまり気にならないらしい。沙理奈のように思ってくれる人が一杯居てくれれば、僕の学園生活は楽なのだが。教室で敬語とかを使われるのは堅苦しいし。

しばらく会話を楽しんだ後、学校へと着いた。玄関で僕たちは二手に別れる。僕の向かった先は職員室だ。段取りは昨日の内に出来ている。

職員室で担任の先生に挨拶をし、そこで少し待機となる。僕はどうやら１―Ｃ組に配属されるらしい。

教室の前まで来ると、この歳にもなって友達ができるかどうか、少々不安になってしまう。それに僕が一つ年上という負い目もある。まあ、何とかなると信じ、僕は先生に呼ばれ教室へと入るのだった。

ドアを開けると、生徒たちは興味津々な目をして僕に視線を送ってくる。四十名ほどの生徒の視線の的となり、僕は極度に緊張してしまう。色々な方向を見て、少しでもベクトルを逸らそうと必死になるのだ。

そんな中、僕の目に飛び込んで来たのは一番後ろの席の少女の姿だった。彼女は僕のことを見て、ぽっかりと口を開けている。そりやそうだろう。彼女にとっちゃ、僕は年上の人物というイメージがあるのだから。

「では、津谷君の席は……………坂上の隣で」

これも何かの運命なのだろうか？ 先生が指定した席は亜矢ちゃん隣の隣なのだ。僕が黙って席に着くと、彼女はぎこちなく首をこっちに向けてくる。何か聞きたくてもどう聞いていいのか分からないという様子だ。

「えっと——訳は後で話すよ」

彼女にそう耳打ちすると、僕はＨＲの先生の話に耳を傾けた。最初から目を付けられる訳にもいかないし、最初は優等生を演じなければ。

一限目が終わり、僕は亜矢ちゃんに訳を話そうとしたのだが、僕は転校生に興味を抱いた連中に囲まれ、動けなくなっていた。

亜矢ちゃんも何か話したそうにしていたが、その連中をかき分けてまで話すまでには至らなかったらしい。

そんな状況が四回リピートし、お昼休みがやってきた。そこで僕はやっと解放される。

というよりは、その状況に嫌気がさした僕が弁当を持って教室から飛び出したのだ。

「裕さん……………」

お弁当の食べられる場所を探し廊下を彷徨っていると、不意にかかるその声に僕は身体を強張らせてしまった。男ながら情けない。振り向くと、そこには亜矢ちゃんの姿があった。

「お疲れ様です」

彼女はクスリと笑い、労いの言葉をかけてくれる。さっきから僕の隣で状況を傍観していたのだから僕の疲れ具合を誰より分かっているのだろう。

「大人気でしたね」

「転校生ってことで珍しがられているだけだよ……………あー、疲れた」

僕はポキポキと腰を鳴らす。

「じゃあ、静かなところ行きませんか？」

「えっ？」

急な提案をし、彼女は僕をどこかに連れて行くべく、廊下を進んだ。もちろん僕もその背中に続く。そして僕はこの場所へとたどり着いた。

そこは学校の屋上だった。広さは然程ない筈なのだが、閉鎖空間に居たせいか、とても素晴らしい場所に感じる。

ここには僕らのほかに数グループの女子がいたが、どのグループ

も静かに昼食をしている。女子のランチほど賑やかなものは無いというのに、ここでは異世界のシキタリでも流行っているのだろうか。四階に相当する高さから見える景色は綺麗であった。この学校からは街も田んぼも見える。遠くの景色は空と調和し、秋の色を一層鮮やかに彩っている。やはり田舎の風景は美しい——もちろん坂の上から見たものには敵わないが。

屋上の端まで僕を呼ぶと、彼女はお弁当を広げる。

「さあ、ご飯にしましょう」

「ああ」

僕もその場に腰をかけ、弁当を広げる。

弁当の中身はオードソックス。卵焼きとマカロニサラダ、漬物、そしてメインに生姜焼き。ご飯の上にはそばろが乗っている。

姉貴はやはり料理の腕をあげているらしい。この味付けといい、組み合わせといい、母の弁当と五分を張っている。僕は夢中になって弁当を胃の中へとかき入れる。

一方、僕の正面にいる亜矢ちゃんは、さっきから弁当に手を付けずに僕の方を見ている。その視線は少し齒がゆい。

「亜矢ちゃん、僕の顔に何か付いてる？」

「えっ？ な、何もありません」

彼女は慌てたように顔を背けてしまう。彼女が僕のことを見ていたのに、彼女自身が気付かなかったような素振りだ。まあ気にしてもしようがないので僕はランチの続きをするのだ。

弁当を平らげ、紙パックのウーロン茶で口を潤す。この食後の幸福感は何とも言えない。僕は彼女がお弁当を食べ終わるまでのひと時をゆつくりと過ごす。

ふと、空を見上げる。秋晴れの空は都会で見るとよりもずっと澄んで見える。

そういえば都会に出た初めてのころは空を空だと思えなかった。ビ

ルに占拠された空はとても狭く、霞がかつたようにはつきりしなかった。そんな空を見つめるたびに、ここに帰りたいたいと思っていたわけ……………

パチツと弁当の蓋が閉まる音がして、僕の視線は正面に向けられる。彼女は両手を合わせるとお弁当を前に一礼する。そんな仕草は亜季もしていた気がする。いつもは行儀の悪いヤツだったが、ご飯の挨拶だけはちゃんとしていた。それが坂上家の教育方針なのだろうか。

「それで裕さん」

「ん？」

「どうして私と同じクラスなんですか？」

亜矢ちゃんはやつとのこととでその疑問を僕に尋ねてきたのだろう。答えを聞きたいあまりウズウズしている様子だ。

朝からずつとそんなことを気にさせてしまったと思うと、少し申し訳ない気持ちになる。

僕は彼女に分かりやすいように、？あの事故？からの出来事を話した。面白い話でもないのに彼女は僕に食い入るように耳を傾けてくれた。

「大変だったんですね……………」

「まあ……………ね」

少し悲しそうな顔をした後、彼女は一变して、とびきりの笑顔を見せる。

「でも裕さんが同級生になってくれて少しうれしいかな」

「うん？」

「あつ、ごめんなさい。別に変な意味じゃないんです！」

「そう？ まあ僕も亜矢ちゃんと同じクラスでよかったと思っていますよ」

少し複雑な心境だが、知り合いのいるクラスに入り、こうして喋れているのだから僕にとってもプラスになることだと考えたい。

それに僕は？元に戻す？ためにここに帰って来たのだ。亜矢ちゃん

んともあの頃と同じく仲良くなりたい。とはいっても、亜矢ちゃんの記憶はほとんど無いのだが……………

「あと、お願いなんですけど……………」

「なに？」

彼女は少し、かしこまったような態度を取る。その仕草に僕は少し構えてしまった。

「あの、私のこと亜矢って呼び捨てしてくれませんか！」

「へっ？」

彼女が口にしたのは僕の予想もしないお願いだった。何故そんなことを僕に頼むか分からない。しかし、彼女が僕を見る瞳は真剣そのものだ。

「うん。いいよ」

断る理由もないので僕は快く承諾する。

「ありがとうございます！」

僕の返事を聞き、感激する彼女を見るとなんだか照れくさい。別に大したことでは無いように思えるのだが……………

「じゃあさっそく私のこと呼んでくれませんか？」

「はあ……………」

こういう突発的な所は亜季と似ていると思う。亜季も突然、変なことを言って僕を困らせることが度々あった。

彼女は僕が名前を呼んでくれるのを待つかのように上目使いで僕のことは見つめる。そんな態度を取られると僕まで緊張をしてしまうではないか。

「あ、亜矢……………」

発した言葉はギクシャクしていたと思う。けれどそんな言葉を聞き、彼女は嬉しそうに「はいっ！」と元気よく返事をするのであった。

不意にも僕はそんな彼女の仕草にドキッとしてしまった。まったくどうなっているのやら……………

それから僕は亜季と他愛ない話をして昼のひと時を過ごす。

名前を呼び捨てにした。その程度。しかし、僕らの距離は縮まっ
たように感じるのだから不思議だ。

夢とキツネ耳

「ただいまー」

「おかえりー」

家に帰ると姉貴が先に帰ってきていた。普通に過ごせば僕の方が早く帰って来れる計算なのだが、今日はいろいろな部活に勧誘され、引っぱりダコになっていたせいで僕の方が遅い帰還となったのだ。

キッチンを走り回る姉貴を横目に、僕はリビングのソファに腰を掛けてテレビの電源を入れる。ゴールデンタイム手前ということでチャンネルを回してもニュースしかやっていない。仕方ないので僕はカバンの中から小説を取り出し、それを読み始めた。僕は運動が出来ない時間が長かったので必然的に本を読むことが多くなっていた。どのジャンルが好きというわけではなく、エッセイからライトノベルまで幅広く手を伸ばしている。

ちなみに今読んでいるのは恋愛小説だ。こういうものをしていると無性に恋をしたくなる。僕は生まれてこの方、彼女というものを作ったことがない。だからこそ、その未知のものに惹かれてしまうのかもしれない。とはいっても転校早々、そんなチャンスはないと思う。だが長い高校生活のうちに恋人の一人や二人を作りたいと思うのが人の性つてもものだろう。

「裕。ごはんよ」

姉貴の声に僕は本に栞を挟み、ダイニングへと向かう。

今日のご飯は匂い通り、焼き魚と味噌汁という質素なものであった。

「裕。何かいいことでもあったの？」

姉貴は僕の顔を見ながら、そんな言葉をかけてくる。

「なんで？」

「なんだか嬉しそうだから」

僕は自分の顔を触りながら、どんな顔をしているか確かめた。別

に普通通りだと思っただが。姉貴のセンサーに引っかかるというこ
とはニヤニヤでもしていたのだろうか。

「亜矢ちゃんとかあったの？」

「えっ、何で分かったの？」

「ただの勘よ。カ・ン」

姉貴はフフッと笑うと意地悪そうな目で僕を見る。

「まあ、裕は単純だからね」

「どういう意味だよ！」

僕は単純とか言われるのがそんなに好きじゃない。なんだか子ど
も扱いされるようで嫌だからだ。

「まあ、そんな調子なら大丈夫そうね」

「なにが？」

「うっん。なんでもない」

僕は姉貴が何を言おうとしたのか分からなかった。その答えが出
る前に、姉貴は逃げるようにテーブルを立ち上がる。

「お風呂、先に入るわよ」

「はいどうぞ」

廊下から聞こえてくる声に僕は大きな声で返答をする。

さて、僕もゆっくりはしてられない。食事の後片付けをした後
は宿題だ。早くここの生活に慣れなくてはいけないのだから。

今日、学校から出された宿題は思ったよりも簡単であった。これ
ならば当分は勉学の面では楽が出来るはずだ。

余った時間を僕は読書に当てる。丁度良く、外からは鈴虫の音が
聞こえている。都会では聞けなかったそんな声をBGMに僕の読書
は進んでいった。

気が付けば時計の針は深夜を回っている。どうやら熱中し過ぎて
いたらしい。僕はスタンドライトを消すと布団に潜り、目を閉じた。
先ほどまで小説を見ていたせいかな、どうしても頭の中にいろいろな

情景が駆け巡ってしまう。うるさい頭の中を沈めるように僕は固く目を瞑った。

どのくらい時間が経ったのだろうか？僕は白い空間の中を漂っていた。そこでは自分が立っているのか座っているかすら、分からない。この感覚は知っていた。これは夢だと直感的に分かる。しかし、こんなに夢を夢だと思えたことはあるだろうか？

そんな疑問を他所に僕の足は前に進んでいた。実際は、僕自身が進んでいるのか、同じ場所に留まっているのか、はたまた戻っているのかすら分からない。だが、前進していると信じなければ前に進めない気がしたので、僕は疑問を浮かべないように努力しながら視線を前にやり続けた。

その甲斐あって、しばらくすると白い霧の奥に何かのシルエットが見えた。それは小さく、子供のように見える。目を凝らしてその正体を掴もうとする。その思いが叶ったのか、視界の霧は段々と晴れていった。

次の瞬間に目に入ったのは激しい痛みであった。直接何かされたわけではない。僕の瞳に急に眩しい光が入ってきたのだ。

恐る恐る目を開けると、そこはあの坂の上であった。どういう原理でここに辿りつけたのかは知らない。夢だからと納得するのが一番手っ取り早いだろう。

僕は臆することなく広場に向かって直進する。夕陽に染まる風景は僕の頭にある通り、綺麗なものであった。

それだけではない。この乾いた空気の匂い。風の音。そして少し肌寒い気温。すべてが僕のイメージ通りなのだ。

そんなことに気を取られ、僕は謎のシルエットのことをすっかりと忘れていた。辺りをキョロキョロと見渡す。しかし、そこには先

ほどの人物のような姿は影形無い。

——ガサツ、そんな音がした。僕はその音の元を探す。そして見つけたのだ。紅葉の樹の枝に腰掛ける少女を。

彼女は幹にもたれ掛かり、夕陽を眺めている。紅い光に負けないほどの純白の着物が印象的だ。年はかなり幼く見える。おそらくは小学生の中学年ぐらいだろう。

だが、それよりも僕は彼女のことが心配になった。少女が腰掛けしている木の枝は細く今にも折れそうな気がしたのだ。何故そんなところに彼女が居るのかは分からない。しかし、その枝から地面までは優に三メートル弱はある。あんな小さい子が、そんな高所から落ちたら大怪我をしてしまっだろう。

「ねえ、危ないよ！ 降りて来れる？」

慌てた僕は彼女へと声をかける。声に気が付いたのか彼女は僕のほうを見る。そして次の瞬間、とんでもないことをしたのだ。

彼女は静かに枝から降下する。その動作が静か過ぎて、僕は何が起きたか分からなかった。しかし、すぐに頭の回転が追いつく。飛び降りたのだ！ 彼女は！

「危ない！」

僕は咄嗟に走り出そうとするが、格好悪いことに湿った落ち葉に足を取られて転んでしまう。それはまるでヘッドスライディングをしたような格好だ。

それでも彼女を受け止めようと、手をまっすぐと伸ばした。

動作の途中で僕は目を瞑ってしまう。彼女が地面に叩きつけられるところを見たくなかったからだ。しかし、彼女が地面に激突したような音は、いつまで経ってもしなかった。

恐る恐る目を開けると、僕の鼻先に少女が立っていた。彼女は両足でしっかりと立ち、どこも怪我をした様子はない。

そこで僕は思い出す。これは夢なのだと。

夢なのに大げさな行動をした自分を少し恥ずかしく思いながら、僕も起き上がる。

視線を上げた途端、僕はギョツとしてしまふ。さつきは気が付かなかったが彼女の頭には人間にありえないものが付いているのだ。フワフワとしていて、時折ピクツと動く。それは紛れもなく動物の耳であつた。

ここまでリアルであるとそれが作り物であるとも思えなくなる。

僕はそこで少女の視線に気が付いた。どうやら僕は彼女の耳をずつと凝視していたらしい。

「あつ、ごめんね」

そう言い、僕は彼女の顔へと視線を移す。彼女は小さいながらすぐく整つた顔つきをしていた。銀の長く伸びた髪、その雪のように白い肌、大きな琥珀色の瞳、そして赤い唇。また僕は彼女の顔に見入つてしまいそうになる。

「えつと、君の名前は？」

僕は威圧感を与えないように彼女の前にしゃがみ込み視線を合わせる。しかし彼女はプイツと視線を逸らしてしまふ。どうやら嫌われたらしい………まあ、とりあえず僕は自己紹介を試みる。

「僕の名前は裕。君はこの近くの子？」

「……………」

彼女は依然そつぽを向いて答えてくれない。夢だとしてもちよつとシヨックだ。僕は子供に嫌われるような怖い顔をしてないと思うのだけれど……………

彼女は僕の顔をじつと見ると、柵のほうへと歩き出す。僕はどうしていいか分からずに、彼女の後を追う。

彼女は柵に手を掛け、夕陽で染まる街を見下ろした。

「君、ここが好きなの？」

少女はコクツと頷く。その相槌は今日一番の成果であつた。

「僕も好きなんだ、ここ」

僕も柵のそばへと移動し、街を眺める。彼女の頭に手を当てると、彼女は気持ち良さそうに頭を手に擦り付けてくる。どうやら頭を撫でられるのは好きらしい。

「ねえ、裕」

しばらく、彼女の頭を撫で回していると、彼女はふいに僕のことを呼ぶ。呼び捨てなのは気になったがそこは大人の対応だ。

「なに？」

彼女は一息つき、返事をした。

「逢いたい？ あの子に」

「えっ？」

僕は少女のほうを向いてしまう。彼女は冗談で言ったのだろうか？ あの子というのは……僕にとっては一人しか思い浮かばない。というより、なぜ彼女のことを知っているのだろうか？

僕は目の前の少女を見つめる。彼女はその大きな瞳を僕に向け答えを待っているようにも見える。

「遭いたいに決まってるじゃないか……」

僕はそう言った。今までこんな言葉は誰にも言わなかった。僕自身、この言葉を心のどこかに封印していた。この言葉を口にしてしまえば、彼女のことまで心が押し潰されてしまうと思っていたから。

彼女は僕の言葉を聞いた少女は、スウツと指を僕の顔の前に持ってくる。今にも折れそうな細い指は僕の頬に触れる。白い雪の指はとても温かった。その指は僕の頬を流れる涙をふき取る。

「泣かないで、裕」

そういつて彼女は僕のそばを離れる。そして、

「その想い、忘れないでね」

そう言つて坂を下つて行った。

僕は彼女の姿が完全に見えなくなるまでその場に立ち尽くしていた。その頬には温かな温もりがいつまでも残っていた。

思い出の場所。そして――

鳥の声が僕を覚醒させる。だが僕の心はどこかボーっとしていた。先ほどまで夢の中に居た気さえする。身体は休まっているのだが、どこか足取りが重い。

夢の中に出てきた少女は誰なのだろう？ 彼女は僕に何を伝えたかったのだろうか？ そんな考えばかりが頭を巡っている。

「馬鹿バカしい……………ただの夢だろ」

僕はそう自分に言い聞かせ、いつもの生活を送るべく、ダイニングへと向かった。

家を出ると昨日のことがデジャヴするように沙理奈が路地から飛び出してくる。

「裕くん。おはよ」

「ああ、おはよう」

僕は空元気で笑顔を見せる。

「裕くん、昨日は学校楽しめた？」

「ああ、それなりにな」

「よかった」

沙理奈は僕の言葉を聞くと自分のことのように嬉しそうに笑う。

そんな笑顔の沙理奈の後ろに誰かがいることに僕は気が付いた。そのシルエットは見たことがあった。

「ん？」

沙理奈は僕の視線に気が付き、後ろを振り向く。その動作にあわせるように彼女は路地の角へと消えてしまった。

「今のって亜矢ちゃんだよな？」

「ああ、そうだと思う」

沙理奈は少し複雑そうな顔をする。

「そっかぁ……………」

彼女は一人、ウンウンと頷く。

「沙理奈って亜矢と交流があるの？」

「いや、この頃は無いわね」

ということとは、昔は良く遊んでいたのだろうか？亜季とは仲が良かった彼女だ。その妹と仲良くなるのは簡単に想像できた。

「行こう、裕くん。遅れちゃうよ」

「うん」

僕は彼女の言葉に促され、足早に学校へと向かっていた。

「おはよ」

席に着くと僕は先に登校していた亜矢へと声を掛ける。

「おはようございます」

彼女は少しぎこちない笑顔で僕のほうを見てくる。何だかその顔は冴えない。そんな彼女の様子を気にしながらも、HRが始まってしまったので、僕の意識は先生の話へと集中してしまった。それから休み時間がある度に彼女に話をしようとするが何かと邪魔が入り、たいした会話がなく僕は昼休みを迎えていた。

亜矢は鞆を持って、真っ先に廊下へと出て行ってしまう。

「おーい、津谷。いつしよに食べようぜ」

「悪い。僕ちよつと用事がある」

クラスメイトからの誘いを断り僕も鞆を持ち、廊下を出る。何故彼女の事がこんなに気になっているのかは分からなかった。でも、なんとなく今日は彼女と話さないといけない気がしたのだ。僕の足は自然と屋上の方へと向かっていた。彼女の行く場所など僕は一つしか分からない。とは言っても昨日知ったばかりの場所なのだが。まあ居なかつたらそれまでだ。ギャンブルをする気持ちで僕は屋上を目指した。

鉄の扉を開け、屋上をキョロキョロと見渡す。そして見覚えのあ

る後姿を見つけた。彼女は屋上の端で外のほうを向きながら一人お弁当を食べている。何だかその姿は寂しそうに見える。

僕は亜矢へ近づき声をかける。

「亜矢」

「ひゃっ！」

彼女はビクツと肩を震わせ僕のほうを振り返る。幽霊にでも会ったわけではないのだから、そんなに驚かなくても……………

「裕さん？」

「座っていい？」

「は、はい」

彼女はいつも以上に慌てているみたいだ。もしかして悪いタイミングに来てしまったのだろうか？ とりあえず彼女の隣に座り、弁当を広げる。うむ。今日も姉貴は良い仕事をしている。後は亜矢の不自然さが消えれば美味しいお昼となりそうだ。

食事をしている間も彼女は僕のほうをチラチラと見る。その仕草は明らかにおかしい。僕は今朝、通学路で彼女を見かけたことを思い出した。もしかしたらそのことと何か関係があるんじゃないだろうか？

「ねえ、亜矢。今朝、僕の家近くにいたよね」

「えっ？ えつと……………」

亜矢はモジモジしながら下を向いてしまう。どうやら彼女の一連の態度の変化は朝の出来事と関係しているらしい。

「ごめんなさい。覗くつもりじゃなかったんですけど……………」

「えっ？」

覗く？ 一体彼女は何を覗いたと言うのだろうか？ まさか僕が社会の窓全開で外に飛び出してしまったことではないのだろうか？

「裕さん。沙理奈先輩と付き合っていたんですね……………」

「はい？」

彼女の言葉を聞き、思わず僕は間抜けな返事をしてしまう。

「えっ、えつと。僕と沙理奈が付き合ってる？」

「違うんですか？」

何が何でもいきなり過ぎる。沙理奈と久しぶりに再会したのは三日前だと言うのにこんな短期間で関係を発展させられるほど僕は器用な男ではない。

「誤解だよ。亜矢……………」

「えっ！ でも朝、あんなに仲良さそうに……………」

「ああ、あれは沙理奈が一方的に……………」

とりあえず沙理奈のせいにして、身の潔白を説明しようとする。

「そ、そうなんですか！」

彼女は顔を真っ赤にして、さらに俯いてしまう。自分が勘違いをしていたことを、余程恥ずかしく思っているのだろう。

「えっと、ごめんなさい。私ったら……………」

「あ——いいよ。僕も少し迂闊過ぎたみたいだし」

何人ものクラスメイトに、僕と沙理奈のツーショットは見られているわけだし、同じ誤解を彼らにも与えてしまったのかもしれない。変な噂が立たなければいいが…………

「ほ、ほら。お弁当食べようー！」

「そ、そうですね！」

何となく気まづくなつたので、僕たちは食べることで沈黙を埋める。

それにしてもこの目の前の少女はなぜ、そんなことを気にしていたのだろう？ 別に自分の知り合い合程度程度の人物がデートしている場面に遭遇しても特に気にならないと思うのだが。というかデートって感じでもなかったし。

「年頃の女の子は何を考えているか分からん」と僕は年寄りじみた言葉で自己完結をするのであった。

そして、食べるものが無くなり、やっと普通の会話が始まるのだ。「裕さん。昨日、部活の人たちに引っ張りダコでしたよね？」

「うん。驚いたよ」

「今の時期に部活に入ってくれる人なんていないですから」
「そっか」

前に居た学校ではそんなに部活が盛んではなかったの、ここの部活の活気が目新しく感じた。

「何か部活に入るんですか？」

「ん。運動部は無理だから、入るなら文化部かな」

「文化部ですか」

「それよりも、亜矢は何か部活に入ってるの？」

「私はバイトをしてるんで何にも……………」

「そうなんだ」

白狐高校は進学校でありながら特にバイトなどを禁止していない。姉貴も在学中からバイトに勤しんでいたと聞いている。だが、町が町だけあってバイトを募集している所は少ないはずだ。

そんな状況で彼女がどこでバイトをしているのか気になったが、その質問をする前に昼休み終りの予鈴が鳴ってしまふ。次の時間は移動教室だ。移動時間を合わせればギリギリなので、僕らは会話よりも移動を優先するのであった。

眠い、眠い、五、六限目を終了し、僕は今日の学業から解放される。大した疲れてはいないのだが、学校にいる理由も無い。自分自身、部活をやっているわけではないし、友達の大半は課外活動に向かっている。つまり帰るしか選択肢が無いのだ。

昇降口で靴を履き替えていると、

「裕」

僕の名を呼ぶ声がした。それは男の人の声だった。振り向くと目の前に何かが迫ってきた。僕はそれを素早く手でキャッチする。

「つと……………」

手で掴んだのは紙パックのお茶であった。そのお茶が飛んできた方を見ると二人の人物が立っていた。一人は今朝も見た少女。沙理奈だ。もう一人の男の方は知らない人であった。

「おっ、本当に裕だ」

男はいきなり僕にヘッドロックをかけてくる。

「いたたた……なに！」

「久しぶりだなあ、おい！」

彼は半ば本気で技をかけてくる。僕は手で地面をバンバンと叩きギブアップ宣言をする。

「涼太くん。苦しがつているわよ」

「おっ、わりいわりい」

彼は沙理奈の言葉を聞き、手を離す。僕はごほごほと咳をしながら、馬鹿力男のを見た。そこで彼の顔を凝視し、やつと思い出した。僕は知っている。

「笹本！ 手加減しろって！」

「いやあ、久しぶりで嬉しくってな、つい」

僕の叫びにも笹本は動じず、反省していないであろう笑顔を見せた。

感動の再開で絞殺されてはたまらない。僕は次の攻撃を警戒しながら笹本のことを見た。

彼は小学校からの友達の笹本 涼太だ。小さいころと比べて体型もガッチリしている。僕よりも背も高くなっている。それによって技の威力も段違いにパワーアップしているようだ。首がズキズキする。

「それ、俺からのプレゼントな」

笹本は僕の握っているお茶のパックを指さして豪快に笑う。

「ああ、サンキュー」

「で、裕。これから少し時間あるか？」

「ん？ 大丈夫だけど」

「これからお前の歓迎会をする」

唐突なアイディアだったが、（半ば強制的に）僕は彼らに連れられて商店街へと来ていた。

「じゃあ、茶でも飲んでくか」

涼太はニヤニヤしながらある喫茶店のドアを指す。

カフェ？ ホワイト・フォックス？ その名前によく見覚えがあった。

「な、なあ。別の所にしないか？」

「うん？ なんで？」

知っているくせに沙理奈はニヤニヤしながら僕の顔を覗いてくる。

「このコーヒーは安いし旨いんだぜ」

二人は僕の両脇に張り付き、強引に僕を店の中に連れて行くこととする。

これすら強制イベントらしい……………僕は覚悟を決めて店の中に入ってしまった。

店の中はレトロな落ち着いた雰囲気醸し出している。僕らと同じ目的で来店した学生や主婦のみなさんが席を埋めている。

「いらっしやいませー」

聞き覚えがある声の方を見ると、僕の予想通り、そこには僕の知っている人物が立っていた。

「こんにちは海晴さん」

沙理奈は元気良く挨拶をする。

「あら、沙理奈ちゃん、涼太君。それと……………」

姉貴はジーツと僕の方を見る。

「あら、なに。裕。もしかしてお姉ちゃんの仕事姿、見に来たのかしら？」

姉貴は着ているウェイトレスの服を見せつけるように僕の前に出

てくる。

「そんなんじゃないよ！」

僕はそんな姉貴の言葉をムキになって否定する。

「それよりも早く案内しろよ！」

「はいはい。こわーいお客様ね」

姉貴は僕らを一番奥の席まで案内した。僕は席に不機嫌に座る。

「まったく、二人とも何を考えてるんだよ！」

「まあまあ、裕くん落ち着いて。なに頼む？」

「そうだ。裕。あんな可愛い姉ちゃん、羨ましいぞ！」

二人は僕の気も知らずにそれぞれ勝手なことを言いやがる。僕はメニューを構え、不機嫌な顔を隠す。

僕はとりあえずアイスコーヒーを頼む。沙理奈はカフェラテとプリンを笹本はココアを注文する。

「すいませーん！」

全員の注文を確認すると沙理奈は店員を呼んだ。僕は姉貴が来ないようにお願いながらその様子を伺った。だが足早に近づいてくる少女を見て、僕は本日二度目の衝撃を受けたのだ。

「あれ？ 亜矢？」

「あつ、裕さん……………」

そこで僕は数秒間固まってしまふ。だが彼女は我を取り戻したようにメモ帳のようなものを取り出して注文を確認していく。その仕事ぶりからして結構長く働いているのだろう。テキパキと動くその仕草は結構、様になっている。

そんな彼女の去っていく後姿を、僕はついつい眺めてしまった。

「驚いたって顔だね。裕くん」

「ああ、まあな」

「それにしても裕の驚く顔、傑作だぜ」

「もう、からかうなよ！」

その後、僕らと談笑する。そんなことをしていると小学校時代に戻ったみたいなのがする。時折、思い出す恥ずかしいエピソードも

今となれば笑い話になるのだ。

「っと、もうこんな時間か」

時計を見た笹本は急に立ち上がる。

「それじゃ、俺は帰るぜ」

彼はテーブルの上に自分の分のお金を置くと店から出ていった。

「私たちはどうする？」

「うーん」

僕は悩んだ。そしてあることが頭を過ぎった。それは今朝の夢のことであつた。あれは夢であつたのだろうが、何となく気になつてしまうのだ。僕は今日、キツネ坂に行くべきなのだろう。

「沙理奈、僕らも帰ろうか」

「うん、そうだね」

僕はレジに並び、お会計を済ませる。亜矢にお金を渡すとなんだか変な感じがする。彼女にとつてもそれは同じようだ。だが営業スマイルとは一味違う笑顔を僕に見せてくれた。

「ありがとうございます」

彼女はそう言つて、僕に軽く手を振ってくれる。僕はそれに応えるように少し手を振る。何だか恥ずかしい。その後、照れていることがバレ、沙理奈にからかわれたのは言うまでもない。

店から出ると辺りは夕陽で染まっていた。これからキツネ坂を登れば確実に日が暮れてしまふだろう。しかし、僕の意味は変わらなかった。

それに沙理奈の家も坂の途中にあるのだから、彼女を送っていくということも考えれば一石二鳥というものだ。

僕は沙理奈と夕暮れ時の商店街を歩く。そこには僕らと同じぐらいの年頃の学生のカップルの姿を見かけた。その姿を見て僕は亜矢にかけられた言葉を思い出してしまふ。

もしかしたら僕らはカップルに見えるのではないか？そう思うと僕は少し沙理奈と距離を離して歩くのであった。

「ふふふ」

沙理奈はそんな僕の様子を笑いながら見てくる。

「送ってくれるなんて、裕くんもオトナになったね」

「別に僕もこっちに用事あるだけだって……………」

「そこは嘘でもそんなことは言わないの！！」

沙理奈は僕の脇腹を小突いてくる。

ここまで僕をリードするようになった彼女のほうが余程、オトナになったんだと思うが……………

僕の後ろにいたオドオドした少女は、今、僕の前を歩いている。

その姿はなぜか亜季の姿と重なった。

「ん？ どうしたの？」

「いや、なんか、昔のことを思い出しちゃって……………」

僕のそんな言葉に少し彼女は驚いた顔を見せる。しかしその顔はすぐに笑顔になる。

「そうだね、私と裕くんと亜季ちゃんだね」

「ああ……………」

彼女の口から亜季という単語を聞く僕の心は疼いた。でもそれは彼女も同じようだ。その笑顔の裏側には寂しさが窺える。

「行こう。裕くん。日が暮れちゃうよ」

「そうだな」

僕たちは再び歩き始める。

紅葉に染まった坂を僕たちは歩く。思った以上に時間が掛らず坂の中腹まで来てしまった。

「裕くん、私、ここだから」

沙理奈は坂の途中の神社のほうを指差す。ボーっとしていたせい

で、僕は目的地に着いたことに気が付かなかったのだ。

「じゃあね、裕くん」

「あつ、沙理奈」

「ん？ 何？」

「坂の上まで行ってみないか？」

僕は沙理奈にそんな提案を試みる。

「ダメ」

彼女の口から出た意外な言葉に僕は驚きを隠せなかった。まさか断られるなんて思っただけじゃなかったから。

「そんな残念そうな顔しないで、ね」

彼女は可愛い笑顔を僕に見せてくれる。同時にその笑顔は僕に質問をすることを許さないようなものにも見える。

「バイバイ」

「ああ、バイバイ……」

沙理奈の笑顔に後押しされるように、僕は一人で坂の頂上を目指す。

僕が頂上に辿り着いたとき、丁度、太陽は山の陰へと落ちるところであった。

ここから見下ろす街は電気の明かりによってライトアップされ、その光は自然のそれとは違う美しさがある。そんな景色を見ていると不意に後ろから足音が聞こえてくる。

僕がそつと振り向くと、そこには小さな女の子の姿があった。その姿を見て、僕は心臓が飛び出しそうになる。

「裕ちゃん、あそぼっ！」

「えっ？」

僕はその子に突然手首をつかまれる。この温もり、夢ではない。でもありえないのだ……

「ん？ 裕ちゃん、どうしたの？」

彼女は僕の顔を覗き込んでくる。そこで僕は自分の体が縮んでい
ることに気が付いた。この目線の低さ、まるで小さい頃に戻ったよ
うな不思議な感じた。

何かなんだか分らない。頭の中が疑問でパンクしそうだ。

「裕ちゃん。遊ばないの？」

だが、そんな僕のことをお構いなしに、彼女は僕の手を引っ張ろ
うとしてくる。

「亜季だよな？」

「うん？ 亜季は亜季だよ」

彼女は僕の質問にしっかりと答える。

「ほら、夕陽見よっ！」

「あっ！」

彼女に引っ張られるように僕は柵のほうへと向かう。その身体は
やけに軽かった。そうだ。小さい頃はどんなに走ってもあまり疲れ
なかったつけ。そして彼女と一緒にこうやって街中を走り回った記
憶がある――

僕らが柵の傍に着いたときには夕陽は山より少し高いところにあ
った。ついさっきの記憶では沈んだはずなのに……………

「綺麗だよな」

亜季はキラキラと宝石のように輝く瞳で、夕陽を眺めていた。

風に揺れるその髪は赤く染まり、サラサラと揺れる。僕は思わず
彼女に見とれてしまう。

「裕くん。さつきからなんか変だよ？」

「えっ？」

彼女は少し不穏な目で僕の顔を覗いてくる。そんな仕草が愛くる
しい。僕は亜季を抱きしめたいという衝動に陥ったが、そんな思い
を自らかみ殺した。

ここで彼女を抱き寄せれば、彼女は消えてしまいそうで怖かった
のだ。

これが神様のいたずらでも僕の作った幻でもいい。僕はこの今の

時間を一瞬でも長く続けたかったのだ。

しばらく夕陽を眺める。いや、僕が眺めていたのは亜季のほうだった。

彼女の姿を見ていると心の中に隠し持っていた、ポツカリと空いた穴が塞がっている気さえした。

この夕陽がずっと沈まなければ、僕は彼女と一緒にいれるのではないか？ そんなことを考え、僕は心の中で夕陽が沈まないことを祈っていた。しかし無情にも夕陽は山へとその姿を消した。

やがて訪れる闇の中で彼女は僕へと笑顔を見せる。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか？」

「えっ？」

帰るという言葉に僕は心が縛られる感覚を覚えた。ここで別れてしまえば彼女とはもう逢えない気がしたのだから。

「嫌だ。帰らない！」

僕の口からは咄嗟に子供の我儘のような台詞が出た。

「でも、家の人が心配しちゃうよ？」

彼女はそんな僕を諭すように優しい言葉を掛けてくる。俯く僕の頭に手を乗せる彼女。そしてスリスリと僕の頭を撫でてくる。

この年でこんな小さな女の子にそんなことをされるのは少し照れくさいが、抵抗せずに僕は頭をなでられ続けた。

「ね、帰ろう？」

魔法のように亜季の言葉は僕の心へと染み込んでくる。

「うん」

亜季に手を取られ、ついに僕は静かに頷いてしまった。

「ねえ、亜季」

「なに？」

「また逢えるよね？」

俯く僕の手を握り締めると、

「うん。約束するよ」

そう言つて小指を僕の小指へと絡めてくる。

「指きりげんまん——」

楽しそうな声を上げ、彼女は僕と約束をする。そして、パツと僕の手を離す。

「またね」

「亜季っ！」

そして亜季はまばゆい光に包まれていく。僕は手を伸ばした。しかし、その手は冷たい空気が漂う空を切っていた。そして僕の視界にはライトアップされた何の変哲のない街の眺めが戻ってくる。

あれは夢だったのか？　僕は彼女に握り締められた左手を眺める。そこには確かな温もりが残っていた。

「亜季……………また逢えるよな……………」

僕はその場に残りたかったが、すぐに踵を返し、帰路へ付いた。いつまでもここに居たら、姉貴に心配されるから。亜季は言ってくれたのだ。帰ろうって。

初デート

あの日から三日、僕は何事もなく日常を過ごしている。学業も友人関係も落ち着いてきて、特に何の問題の無い日常。そんな時間を送っていると、あの時の出来事が本当にあったのかさえ疑問に感じてしまう。

このことを僕は誰にも話していない。誰も信じてくれないだろうし、それに居なくなってしまった亜季と逢ったなんて言ったら、相手はどんなことを言ってくるか分からない。

僕に出来ることは、あの日の時間を忘れないように記憶に留めておくことだけであった。

「裕さん。どうしたの？」

ふと気が付くと、亜矢が僕の席の隣まで来ていた。亜矢の顔を見るとどうしても亜季のことを思い出してしまう。彼女が居てくれたら、こんな風に僕の側にいてくれるのだろうか。

「裕さん、なんだか元気ないですよね？」

「そうかな？」

僕は取り繕ったような笑顔を見せる。でもその笑顔はどこかぎこちなく見えるのだろう。亜矢は少し心配そうな顔をする。

「えっと、裕さん。今日の放課後空いてません？」

「えっと……空いてるけど」

「じゃあ、一緒に出かけませんか？」

彼女はいきなりそんなことを口にする。突然のことだったが、幸運なことに僕には用事などない。

「うん。いいけど」

「やったっ！」

返事をする、彼女は嬉しそう笑顔を見せる。その笑顔には何の曇りもなく、ただただ嬉しそうであった。

時間はあっという間に過ぎ、すぐに放課後の時間がやってくる。H
Rが終わると、彼女はすぐに僕の席へとやってきて、

「校門で待っています」

彼女はそう小さく告げると、級友に挨拶をし、教室を出て行った。
少し時間を置いて、僕は荷物をまとめ次第、彼女の後を追った。

当たり前なことだが彼女はちゃんと待っていてくれた。ここで彼女
がいなかったら、僕は間違いなく泣いたであろう。

だが、彼女は僕をからかうほどひねくれた性格ではない。

亜矢は校門の壁を背に辺りをキョロキョロと窺っている。ほとんど
時間なんて経ってないのに、何刻も待ちわびている様なその仕草
はとても可愛らしかった。

デートの時に相手を待つ彼女はあんな感じなんだろうか。という
か、良く考えればこれはデートにカウントされるのだろうか？

そう思った瞬間に僕は自分の顔が赤くなるのを感じた。思えば、
女子と二人っきりで出かけるなんて小学生以来だ。あのときには感
じなかった恥じらいなどが出てきてしまう。

とりあえず、彼女をこれ以上待たせるのは悪い。僕は足早に彼女
の元に向かって歩いた。

「亜矢」

そう声をかけると、彼女は壁から背を離し、優しい笑顔を見せて
くれる。

「それじゃ、行きましょうか」

そう言っ僕のすぐ側まで寄ってくる。その距離はいつもより少
し近い気がする。僕の緊張感が伝わっているのか、彼女の表情も若
干固い。

「で、どこに行くの？」

僕は尋ねる。これがもしデートであつたら僕がリードしなければ
いけない所だろうが――、生憎、いきなりプランを立てられるほど
器量持ちではない。それに引越してきて間もない僕に考えられる

遊び場なんてたかが知れている。

つまり目的地は彼女に任せるしかないのだ。

「まずは——お茶にしませんか？」

そう言つて亜矢は僕の半歩前を歩き出した。その足取りは、いつもより少しだけ早い気がした。

僕らは放課後の市街地を歩く。僕らと同じぐらいの年頃の学生が、街にはいっぱい居た。その中には？本物？のカップルもいる。彼らは堂々と手を繋ぎ、何でもない談笑を繰り返している。

もしかして、僕らもそう見えているのではないのだろうか？僕は恥ずかしくなり、同じ気持ちであろう隣の亜矢の顔を覗き込んだ。亜矢の表情は特に変わらない。いつも通りの可愛らしい彼女だ。

「何か、顔に付いてますか？」

チラ見したただけなのに、視線に気が付かれた。「何でもないよ」

と僕は返し、道の正面へと視線を戻した。

亜矢は商店街のある場所で足を止めた。この付近の景色は前に見たことがある気がある。それはそうだろう。目に入ってきたのは？ホワイト・フォックス？の看板なのだから。

「ごめんなさい、ここしか思い浮かばなくて」

彼女は僕の啞然とした表情を見て苦笑しながら店の中へと入っていった。彼女自体、自分のアルバイトをしている店に入るのは照れ臭いのだろう。

それにしても、こんな短期間に姉貴のお店に二度もお世話になるとは……………本当に？姉に逢いに来るシスコンの弟？という肩書を持つことになるかもしれないな。

僕の戸惑いを知らずに亜矢は扉に手をかけ、店内に入った。途端、ウェイトレスさんが元気の良い声を掛けてくる。

幸運な事に姉貴ではなかった。その身なりからして、おそらくは高校生のアルバイトだろう。僕が胸を撫で下ろしている間、彼女は親しげに亜矢と会話を交わしていた。

「亜矢、その後ろの子、彼氏？」

そんな会話が聞こえ、僕はドキツとする。

恋愛関係の質問には敏感に反応してしまう年頃なのだ。亜矢は僕のことをどう思っているのだろうか？　僕は愚かにも耳を澄ましてしまう。

「うっん。クラスメイトの裕さん。それに……………」

なんとなくその？　クラスメイト？　という単語が寂しかった。そんな表情を知らずに亜矢はその店員に耳打ちをしている。

「えっ！　うそぉ！」

ウエイトレスの彼女は驚いた表情で僕の顔をマジマジと見てくる。亜矢は彼女に何を吹き込んだと言っただろう？

店員さんに案内され、僕らは一番奥の席まで案内される。そういえば前、来た時もこの席だったっけ……………

亜矢は慣れた手つきでメニューを確認する。この仕草から見て、ここには客としても頻繁に來ているらしい。早くも注文を決めた彼女を待たせないように僕も注文を確定する。

すぐに注文した品が届く。しかし彼女が持ってきたトレイには頼んだ覚えのないチーズケーキが2人分乗っている。

「えっと、これ——」

「これをどうぞ」

ウエイトレスさんは意味ありげな笑顔と小さなメモを残すとその場から去ってしまった。

「差し入れです。美味しく食べてね」　姉より——って……………」
姉貴面して微笑む姉貴の顔が浮かんでくるようだ。僕の表情を見

て亜矢は少し笑っている。

「亜矢、このこと知ってたのか？」

「あつ、はい。海晴さん、今度裕さんが来たらサービスしてやろうって良く言っていましたから」

亜矢は補足説明を織り交ぜながら僕のことをクスクスと笑っていた。

「はあ……………やられたぜ」

僕も笑うしかない。捨てるわけにはいけないので、姉貴の厚意おせっかいをありがたく受け取ることにした。

甘いものがあるせいか、僕らは学校で話すよりも、よりプライベートに近い話をする。

自分の趣味だとか、好きなアーティストだとか。そして、話題は唐突にこの店のこととなる。

「海晴さんってすごい人気なんですよ。お客さんでも、彼女を見るために来ている常連さんがいるとか」

「へえ。あんな小動物みたいなものの、どこがいいのか」

「えーっ！ 絶対可愛いですって！」

亜矢は姉貴を絶賛する。ここで認めれば姉貴に負けた気がするの
で、断固として僕は自分の意見を押し通した。

「それよりも亜矢のウェイトレス姿のほうが似合ってたって」

「えっ？」

僕は反撃を試みる。どうやら効果はバツグンなようだ。

「やだな。からかわないでくださいよ」

そう口で言うも彼女は嬉しそうだ。

こうして彼女と話していると僕は笑顔になってしまふ。その笑顔に答えるように正面の彼女も笑う。その笑顔の連鎖が心地よかった。
「でも、良かった……………裕さん、この頃、元気なかつたので」

「ああ、まあね……」

そうか、彼女は僕のことを心配してくれていたのか。そう思うと嬉しくなる。

「何かあったら、相談に乗りますよ？」

「うん。ありがと……」

相談などできる事柄ではないが、その言葉は覚えておこう。

亜矢も僕と同等、それ以上に亜季に逢いたいと思っているのかもしれない。僕の願いが叶うならば、三人でもう一度、話をしてみたい。無理だろうけれど。

時間が来たので僕らは席を立つ。店の奥にいるであろう姉貴は最後まで姿を見せなかった。仕方が無いので、家に帰ったらお礼を言っておこう。

僕らは二人だけの帰路に着く。

何となく自然に隣にいる亜矢のことが不思議に感じる。彼女はあの子ではないのに、こうやって僕の隣に居てくれる。それは決して悪い気持ちでは無かった。

「じゃあ、裕さん。また明日」

「ああ……」

笑顔で手を振る彼女を家の前で見送った。彼女が玄関の扉に消えた途端、僕の周りは急に寂しくなる。

「僕も帰らないと……」

先ほどまでのゆっくりした歩調のまま、僕は家へと帰った。

キッチンで晩御飯の支度をしていると、玄関の扉が開く音がした。十中八九、姉貴が帰って来たのだろう。

予想通り疲れ顔をした姉貴が部屋へと入ってくる。姉貴はソファ―にドツと腰を下ろし、肩をクルクルと回している。

「おかえり」

「ただいまー。疲れたー」

姉貴はそのままソファ―に寝っ転がるとＴＶのスイッチを入れた。姉貴、今日はケーキありがとうな」

ここで言わなければ忘れそうだったので、僕は素直に姉貴に感謝を述べた。

「あー、気にしないでいいわよ」

こういう姉貴を見ていると大人だなあと思う。

「それより裕、お姉ちゃん、喉が渴いたんだけど？」

「何？ 牛乳でいい？」

「何それ？ お姉ちゃんにもっと背を伸ばせと言いたいの？」

「いや、そんなことは言っていないけど……………」

「じゃあ、胸？ 胸なの！」

はあ……………前言撤回、姉貴はやっぱし、まだまだ子供だ……………僕は姉貴から指定された通りにビールを持って行ってやった。

「つぶつばあー！ 生き返る！」

姉貴は二本目のビールを飲むと、オッサンのようなセリフを吐く。この姿を姉貴のファンという人に見せてやりたい。小さな身体に似つかない、この飲みっぷりには僕も圧倒されてしまう。

「裕。飲むー？」

「あー、遠慮しときます」

顔の赤くなつた姉貴を適当にあしらいながら、僕は食事を進める。

「でー、亜矢ちゃんとはうまくいったの？」

「はあ？」

この酔っ払いは何を言っているのだろうか？

「亜矢、ちゃん、裕のこと、心配してたのよ？」

「ああ、そうみたいだな……」

姉貴が知っているということは、バイトの時にでも亜矢と話したのだろうか？

「裕ー、亜矢ちゃんを悲しませたら、だめなんだからねー！」

「うわぁ、なんだよ姉貴！」

この酔っ払いはいきなり僕の頭を掴むと、腕でギュウギュウと締め付けてくる。

「痛いって、姉貴！」

姉貴はそのままトロンとした目になると、ウトウトとソファのほうへと向かっていった。そしてソファに横になりテレビを見ている。

「まったく、食器ぐらいかたせよ……」

僕は姉貴の食べ終わった食器を流しへと運び、スポンジと洗剤でそれらを洗う。水道の水は目が覚めるほど冷たい。食器洗いが終わる頃には僕の手は真っ赤になっていた。

リビングに行くと姉貴がソファうつ伏せになって寝ていた。

「姉貴、そんなところで寝たら、風邪引くって！」

身体をゆするが反応はない。

「まったく……」

僕は毛布を持ってきて、姉貴の身体へとかけてやる。

「お疲れ様、姉貴」

テレビと部屋の明かりを消すと、僕はその場を後にした。

部屋に戻り、ベッドに寝転がる。今日はどうも宿題をやる気にはならなかった。というより三日前から僕はほとんど勉強に集中できていない。

こうやってベッドに寝ていても、あの日のことが頭を過ぎってし

まうのだ……

ふと、視界の横にオレンジの光が入ってきた。そちらを向くと携帯電話が僕を呼んでいた。開いてみると、画面には着信メールがあった。送り主の名前は坂上 亜矢。

そうだ。今日、喫茶店でやっとメールアドレスを交換したんだっけ……………

どうやら1時間ほど前にこのメールは届いていたらしい。

メールの内容を要約すると、？今日は楽しかったのでまた遊びに行きましよう？ということだった。

僕は今日のことを思い出して、なんとなく自分の顔がニヤけるのを感じてしまった。僕も亜矢と過ごした時間が楽しかったのだ。

ボタンをプッシュしてメールを送信する。そうするとすぐに返事が返ってきた。簡単な文章を送っただけだというのに、彼女は次の話題が広がるようにメールを返してくれる。そんな言葉と言葉のキヤッチボールが楽しい。

気が付けばもう深夜過ぎ、僕は？おやすみ？のメールを送り最期のメール受信を待つ。そして携帯が鳴り、彼女のメールをいち早く確認する。

そこには「おやすみなさい」という言葉と可愛らしい絵文字が記されていた。そのメールを確認して、僕は携帯電話を布団の上に投げ捨て、天井を見る。

同じ姿勢で作業をしていたせいか肘が痛い。しかし僕は満足感に満たされていた。そして改めて思うのだ。今日は楽しかったと……

……

色あせたミサンガと思い出

いつものように朝日が部屋に差込み、僕は目を覚ました。昨日は寝るのが遅かったのに、心なしか、体が軽い。

顔を洗い、キッチンへと出ると、姉貴がソファ―に腰掛けていた。しかし、その顔にはいつもの元気は無く、疲れた大人の顔をしていた。顔色が悪いのは気のせいでは無いだろう。

「おはよう」

僕が挨拶をすると、姉貴は気だるそうに「おはよ」と、だけ返してきた。

姉貴は明らかに調子が悪そうだ。まああれだけ飲めば当然の結果だ。

「姉貴、今日休みだろ？ もっとゆっくりしてれば？」

「あー、そうさせてもらうわ。ごめんね」

そういい残すと、姉貴は自分の部屋へと向かってトボトボと歩いていく。

まったく、折角の休みの朝を二日酔いでダメにするとは、大人つてやつが嫌になる。まあ、姉貴がどう休日を過ごそうが、僕には関係が無い。朝の時間は貴重だ。僕はいつも通り動かなければ。

僕は朝ごはんの支度をする。弁当も自分で作るとなると、ちょっと面倒だが、僕には冷凍食品という強い味方がいる。ちよつとした炒め物をフライパンで作り、それと冷凍食品のハンバーグを弁当箱に詰める。これで完成だ。

たいした手間ではないが、これを毎日やってくれている姉貴には

頭が下がる。だからこそ休みの日ぐらい、ゆっくりしてほしいというのが僕の本音であった。

朝ごはんを使った食器を洗い、自分の身支度を整え、僕は施錠をして家を出た。

「裕さん、おはようございます」

突然、背中にかかった声に振り向くと僕の前には亜矢の姿があった。

「おはよう」

僕が挨拶を返すと彼女は眩しい笑顔を見せてくれる。デートしたのは昨日の今日の事なのでなんだか照れ臭い。

「いっしょに登校いいでしょうか？」

「うーん……どうでしょうか？」

「ええっ！」

僕が意地悪にも悩む素振りを見せると、亜矢は目を丸くして驚く。

「冗談だって」

「もうっ！」

僕の冗談に本気で反応する彼女のリアクションは可愛らしかった。亜矢は少し機嫌を崩し、膨れっ面で僕の前を歩き始めた。まあ、そんな不機嫌は続くはずは無く、すぐに僕たちは横に並んで会話を始める。

亜矢と話しながら登校すると、徒歩二十分という距離がいつそう近く感じた。沙理奈と同じように歩いたことがある道なのに、この違いはなんなのだろうか？

亜矢と一緒に教室に入り、そのまま隣の席で談笑を続ける、僕ら。昨日のデートのお陰で距離は確実に縮まった。僕は亜矢の好きそうな話題を狙って振る。予想通り、亜矢は僕の話に食いついてくれる。

こんなに女子、いや家族以外の人と話したのは何時ぶりだろうか。僕は決して他人と話す事が嫌いでもなければ、苦手でも無い。しかし、都会に居た頃は、特に親しい友達を作らなかった。

仲が良くなれば、良くなるほど、別れた時の悲しみが増える。そんなふうにしてしまうのは、過去のトラウマが影響しているのかもしれない。

けれど、故郷に帰って来てから、僕の気持ちは徐々に変化してきていると思う。クラスメイトとも仲良くやっているし、こうして女友達もできている。

故郷に戻って来たことで、僕は元に戻りつつあるのかもしれない。それが良い事なのか、悪い事なのか、僕には分からないのだが。

体育の準備運動の時間であった。僕は不意にクラスメイトにこう言われた。

「おい。津谷って、坂上と付き合ってるのか？」

「はあ？」

僕はクラスメイトの突然の発言に声を出して驚いてしまう。

「なんで、僕とあや——坂上が？」

「今更、恥ずかしがんなよ。そうやって名前同士で呼ぶのもそうだし、いつも一緒にいるし」

「うっ……………」

僕は苦い顔をしてしまう。彼がそう思っているということはクラス殆どの人が僕たちをカップルだと思っているのかもしれない。

たしかに僕は大半の時間は亜矢と一緒にいる。けれども自分では、ある程度の節度を守っていると考えていた。

「そうそう、俺も最初から、そうだと思ってたよ」

「だよな。転校早々、仲良いもんな」

僕を中心に話題の輪が出来る。僕がムキになって否定するほど彼らは僕をからかうのだ。亜矢と付き合っているという噂が立つのは僕にとつては決して悪いものではない……はず。けれど僕は心のどこかに引っかかりを感じているのだ。

だからその噂を頑なに否定し続ける。

それに亜矢の気持ちも知っていないのに、そんな噂があるのは彼女に対して失礼だ。彼女だって僕を親しい異性の友人だと思っ
ていないだろうし。

「こらあ！　そこ、話をするな！」

体育の先生の一喝によつて、僕はどうかその場から解放された。だが、そんなことを聞いてしまったせい、授業中、頭の中は亜矢のことでいっぱいになってしまっていた。

体育が終わり、教室に戻ると亜矢がいつも通り、僕の隣に来た。

いや、席が隣なのだから当たり前のことなのだが……だが今の心情ではその当たり前さえ、ドキドキしてしまう。

「裕さん」

彼女はいつも通り僕に話しかけてきてくれる。体育の後であるからか、彼女の顔はほんのりと赤い。それにこの匂い……いつもならモヤモヤして臭いと思う清閑スプレーの香りがとても良い匂いに感じた。

「体育疲れましたね。男子は何をやったんですか？」

「えっと……男子はサッカーかな……」

彼女は普通どおり会話をしているつもりなのだが、僕が意識してしまっているのだ。彼女の事を。だから、どうしても僕の返事はギクシャクしたものになってしまう。

「ご、ごめん。僕、トイレ行ってくるよ」
そう言って、僕は亜矢との会話を中断し、大慌てで教室を抜け出した。

「はあ、何をしてんだろ……僕」

トイレの鏡で自分の顔を見ながら、僕はため息をついた。
あんな調子では？彼女を意識しています？と顔に書いてしまっているようなものだ。他人に少し、からかわれたぐらいで、どうにかしている。

ある程度、気持ち치가治まったところで僕はトイレを後にした。
それから放課後までの彼女、もとい、自分自身との戦いは続くのであった。

「おい、裕つ！」

僕を呼ぶ声に足を止める。その声の主はすぐに分かった。

「なに、笹本？」

彼は僕を三階の階段の方へと手招きする。

「相変わらず、暗い顔してるなあ」

彼は僕の顔を見た瞬間、そんなことを言ってくる。出会い頭にそんなことを言われるとさすがに僕も虚しくなる。

「うるさいなあ、イロイロあるんだよ」

「もしかして亜矢ちゃんのことか？」

「うつ……？」

僕は不意にリアクションをしてしまう。その仕草を彼は見逃さなかったようだ。ニヤニヤしながら僕の顔を覗いてくる。

「そうか。で、どんなことだ？」

「教える訳無いじゃん」

「ふーん？ そんな態度とっていいのかな？」

彼は僕の首を掴むとロックヘッドの形を取る。しかも前以上に容赦が無い。

「オラオラ、何があつたか話してみろ！」

「いてて……わかつた、わかつたから………！」

痛み負け、僕は彼へと半ば強制的に相談をさせられるのであった。

僕らは屋上へと上る。幸運なことにそこには人の姿はない。こんなことを言うのには最適な状況であつた。

「最初に言つとくけど、誰にも言つなよ」

「ああ、任せとけ！」

笹本はお調子者だが、昔から人の秘密を暴露する奴ではないと知つていた。だが年月の流れが彼をも変えている恐れがあつたので、僕は固く口止めをしておく。

「僕さあ、亜矢と一緒に居ていいのかな？」

「はあ？ なんで？」

一言で伝わると思つたが、期待通りにはいかないらしい。仕方が無いので僕は掘り下げて話をしていく。

「彼女のことは見てるとさ、どうしてもあの子のことを思い出しちゃうんだ………」

「亜季、か………」

笹本の顔は少し曇る。僕ほどではなかったが、笹本と亜季も友人関係にあつた。

亜季は誰とでも気軽に話せる太陽のような元気な子であつた。だから彼女にとってはクラス全員が友達のようなものだった。そんな彼女を通して、僕は友達をたくさん作つた。

亜季がいなければ、沙理奈や笹本とも友達になつていなかったかもしれない。

「今も亜季のことが好きなのか？」

「……………」

そんな彼の質問に僕は答えられなかった。それは僕自身、答えが見つけれないからであった。

あの頃の僕は亜季のことが好きだった。これは紛れもない真実だ。でも今の僕はどうなのだろう？

居なくなった人へのこの想い、これは好きというものののだろうか？

もしかしたら、僕はもう亜季のことが好きではなくなっているのかもしれない。

ただ単に、あの頃の気持ちを忘れないようにと、どこか自分の気持ちを縛っているのかもしれない。

好きと思っていれば、彼女は自分の心に居てくれる——と。

「まあ、悩むのは勝手だけど、はつきりしない態度で亜矢ちゃんを悲しませるなよ」

「ああ……………」

自分の思考が邪魔して、笹本が何故、「亜矢ちゃんを悲しませるな」と言ったのか、分からなかった。そんな言葉、すぐに忘れてしまった——

その日の帰り道、いつもより身体が重かった。いや、身体というより心だ。

どうやって学校を抜けて、どこに向かって歩いているかすら分からない。

思いつくままに歩みを進め、僕はある場所へと辿り着いた。

「まったく、なんでここに来ちゃうんだろう？」

僕は坂の上の丘でひとり立っていた。

坂の上から見る風景は、いつもと同じ夕焼けの赤。綺麗だ。

心がこつも曇っているのに、ここから見る風景は変わらずに綺麗だ。

あれだけ憎んでいたビルも、オブジェクトの一つと考えれば、そう邪魔ではなくなる。

景色を見つめながら僕は心の中で彼女へと呼びかける……………

（亜季……………来たよ。一緒に遊ぼう）

心の中で何度も囁いた。

「そんな、来てくれる訳ないよな……………」

僕は自分の行動に自嘲の笑みを浮かべ、そう呟いた。

くだらない——彼女はもういないのだ、と、心に言い聞かせ。

僕が帰ろうと踵を返すと、急に突風が吹いた。

その風に思わず僕は目を瞑る。この時期は空気が冷たいというのはその風はひどく暖かった。それにこの匂い……………

僕の心臓はドクンと、高鳴った。そしてすぐさまに振り向くのだ。

「裕ちゃん」

「亜季……………」

振り返った先、三步分の距離を挟んだ場所に亜季は立っていた。

僕らは並んで、そこにあった腰かけに座り、夕陽を眺めている。

何か亜季に声を掛けたかったが、何にも話題が思いつかない。僕たちは以前、何を話しただろうか？

学校であった些細な話。テレビのドラマやアニメの話。今度の休みはどこかに行こうという話――

亜季はいつも僕に話題を振る側だったな。彼女が無限に話題を出してくれるから、僕は答えるだけでいくらでも話が続いた。

亜季が話を始めなければ、こつも世界は静かだ。

風の音と、虫の声だけが聞こえている。

彼女は夕焼けに染まる街を見下ろしている。亜季はこの風景を見て何を思っているのだろうか？　それが僕と同じであれば良いと思っただ。

「裕ちゃん」

「なに？」

「悩みがあるんだよね？」

「うん……………」

「そっかぁ……………ごめんね。やっぱり私のことだよね？」

彼女は少し困ったような顔で僕の顔を覗く。

「ううん、亜季は悪くないよ……………」

僕は彼女の言葉を否定する。彼女は僕の言葉を聞いて、また笑顔になってくれる。

「裕ちゃんって、本当に優しいよね」

「そう……………かな……………」

「そうやって私のことで真剣に悩んでくれる……………昔からそうだった。それって、すごく嬉しいよ……………」

亜季は膝を抱え、身体を抱くように座り直す。

「けど……………私のことを忘れてもいいんだよ？」

彼女は呟きのようにそんな言葉を口にする。彼女の表情は変わら

ない。

けれど、僕は亜季の声がとても寂しいように聞こえた。

そんな言葉をかき消すかの如く、僕は今まで出したことないぐら
いの大きな声を出した。

「そんなこと出来るわけないよ！ そんなこと言わないでよ！」

感きわまり、僕の目からは涙が出てしまう。喉が熱い。胸が締め
付けられるように痛い。

彼女は表情を変えてくれない。どうして？ どうして！ 笑って
くれよ、亜季……………

「でも——分かってるでしょ。私はもういないんだよ？」

「そんなの関係ない！ 亜季はここにいてくれているだろ？ ずつ
と傍にいてくれよ！」

雪崩のように次々と言葉が出てくる。今まで心の奥底に留めてお
いた言葉が……………

「裕ちゃん……………」

彼女は何の言葉も僕に言ってくれない。

ずつと傍にいる…………… そんな言葉が聞こえてくれば、どんなに僕が
救われることか……………

しかし、彼女は困ったような顔をするだけで僕の望んだ言葉を言
うことは無かった。

「変だよ……………？ 前は私がワガママで裕ちゃんのことを困らせて
たのにな」

そう、亜季はワガママでいつも僕を振り回していた。でも亜季の
そんなところも僕は好きだったのだ。

「前みたいに、僕を困らせてくれよ、亜季！ 今ならどんなワガマ
マだって聞いてやれるよ……………」

俯いた僕の頬に温かいものが触れる。そのまま彼女は腕を僕の背中へと回してくる。

「じゃあ、もう少しだけ……………このままでいい？」

僕は無言でコクンと頷いた。

彼女の身体の温度は、今まで感じたことがないほど温かい。

震える背中を抱きしめる彼女の手、その小さな掌からは力強さを感じた。

どのぐらいの時間、僕たちはそのようにしていたのだろうか？

彼女が身体を離れた時、秋の風が吹き込んでくる。僕の胸はとても冷たく感じた。

もっともっと彼女を抱きしめていたかった。どこにも逃げられないように。

しかし、身体を離す彼女の腕の力は強かった。それに抗えなく、僕は腕を離れたのだ。

「裕ちゃん、もう時間だよ」

「うん……………」

「大丈夫。また逢えるよ」

彼女は立ち上がり、笑顔で手を振る。僕もそんな彼女へと大きく手を振った。

そして夕闇が訪れるように、彼女の姿も徐々に消えていった。

最後に目に留まったのは彼女の手にあるミサンガであった。

「おかえりー。裕。遅かったわね？」

姉貴に掛けられた言葉は無視し、僕は自分の部屋へと駆け込んだ。

ついさっき、ひと昔のことを思い出したのだ。彼女の手首に結ばれていたミサンガ。それは僕とお揃いで買ったものだった。狂ったように机の中を漁る。引出しの中の物が外に散らかろうと構わなかった。

そして、ついに引き出しの奥にある色褪せたお菓子の箱を発見した。このアルミ製の箱は僕の思い出——いわゆる宝箱であった。心臓の高鳴りを感じながら蓋を開ける。そして、僕は見つけたのだ。彼女と同じ色をしたミサンガを……………

そのミサンガを握り締めると思い出が蘇ってくる。

商店街のある店で僕らはそれを買った。亜季は半ば強引に僕にそのミサンガを買わせた。

当時、おこづかいの少なかった僕は、その事で亜季と喧嘩をした。けれど喧嘩で亜季に勝てるはずはなく、僕はいいやミサンガを買うことになったのだ。

彼女はそのお揃いのミサンガが、かなり気に入ったようで片時も離さずそれを身に付けていた。当の僕は、お揃いという響きに恥ずかしがって、それを机の奥底へとしまってしまったのだ。

「裕ちゃん。ミサンガが切れたとき、願いが叶うんだって」

そんな亜季の言ったワンフレーズが頭に響いている。

「亜季、君は何を願ったんだ？」

僕はミサンガを手首に巻く。これで願いが叶うのならば……………
僕の願いは……………

雨に消された言葉

その日から僕はミサングを身に着けていた。それは僕の心の変化を表すようなものであった。

あの日、僕は亜季と逢い、自分の意思を確認したのだ。

亜季を失いたくは無い。僕の何を犠牲にしても……

あの時、僕は亜季を守れなかった。だから……

今度こそ彼女を守ってみせる、と――。

「おはよう裕さん」

「おはよう………」

亜矢の笑顔でうつかり、僕は笑顔になりそうになる。しかし、そんな自分自身を律し、わざわざ不機嫌そうな顔をする。

亜矢は僕の顔を見て、困った顔をした。そしてそれ以上僕に会話をすることはなかった。

僕は亜矢と距離を置くことにしたのだ。亜矢に惹かれれば惹かれるほど彼女……… 亜季が離れていってしまう気がしていたのだ。

亜矢はとても魅力的で一緒にいても楽しい。僕に何の事情もなければ彼女を好きになっっているに違いない………

けれど、僕には亜季がいるのだ。彼女が亜季と似ていようと、亜矢は亜季の代わりにはなれない。

だから……… 僕は唇を噛み締める想いで彼女を避けるのだ。

僕の素っ気無い態度を見る彼女は、時折、寂しそうな顔をする。

そんな顔を見ていると、僕も耐えられなくなる。ここで笑って話せたらどんなに楽しいだろうか？

けれど……

僕の心境を表すように、秋雨の日々。朝方に止んでいた雨も夕方になって急に姿を現す。

そんな土砂降りの雨の中、僕は校舎に閉じ込められていた。雨は冷たいだろう。この時期に傘無しで家に帰るのは少々勇気が必要だ。僕だけならばすぐに熱いシャワーを浴びればどうにかなるだろうが、鞆に入った教科書たちはそうはいかない。

僕に残された選択肢は雨が少しでも納まるまでこの校舎で時を過ごすことであつた。

一人でいると時の流れはとても遅い——永遠とも思われる時間の中、僕の耳には雨音だけが聞こえてくる。

雨に打たれた屋根は悲鳴のようにそれぞれの泣き声をあげる。そんな雨に打たれたら僕も泣いてしまいかもしれなかった。

こんなときに頭に浮かぶのは………

頭に浮かんだのは笑顔の少女——

僕はドキリとした。頭の中に先に浮かんだのは亜季ではなく、亜矢であつたのだ。そのイメージを拭い去ろうと、僕は頭を振る。

しかし、考えれば考えるほど、亜矢のことが思い浮かんでしまう。

僕は叫びたかつた。ひたすら叫びたかつた………
腕のミサंगाを見る。これは決意の証だつたのに………

亜矢と離れば離れるほど、彼女のことを僕は考えてしまうのだ。そんな自分に嫌気が差す。僕は今もまだ亜季と亜矢を天秤にかけているのだ。

机に突っ伏し、空を見上げる。この雨はまだまだ納まりそうになり。
い。

僕はどれだけの時をここで過ごせばよいのだろうか？

雨音がする。腕が痛い……………僕は何をしてしまったのだっけ…

……………

硬い机から身体を起こすとそこは教室であつた。どうやら寝てしまつていたらしい。外はまだ雨が降り続いているようだ。空の色からしてたいした時間は経っていないだろう……

何かが視線の端に見えた。誰？

その人物は横から僕のことを覗き込んでいるらしい。

「亜季……………？」

霞む目で彼女のことを見つめる。

「裕さん……………」

僕の頭は彼女の声、いや、呼び方で急回転する。彼女は泣きそうな顔で僕のことを見つめていた。

「亜矢……………僕、寝てたの？」

「ご、ごめんなさい。見えているつもりはなかったんですけど……………」

……………」

彼女は顔を背けてしまう。

「いや、大丈夫……………」

こんな会話ですら、新鮮に感じてしまう。それほど僕は亜矢としゃべってなかったのだ。

「えっと、なんでここにいるの？」

亜矢に問いかける。

「えっと、図書室で宿題をしていたんです」

「そっか……」

「で、裕さんはなんでここにいるんですか？」

「えっと……雨……」

何でだっけ？ 確か雨が降っていて、それで雨宿りで……

頭が上手く働かない。どうやら僕はまだ寝ぼけているらしい。

「もしかして傘を忘れたんですか？」

「ああ、たぶんそんな感じ」

亜矢は僕の言葉を聞くと、少し間をおき、

「傘あるんですけど、一緒に帰りませんか？」

一言、そう言った。

亜矢も僕も小柄なほうにしろ、この歳の人間が濡れずに一緒に傘に入ることは難しい。それでも僕らは懸命に小さな屋根の中に入ろうとする。そうすれば身体が寄ってしまうのは必然なことであった。僕の左半身は冷たい雨に打たれ、冷えているはずなのに、心臓はバクバクと音を立てて、全身に血液を送り続けている。

すぐ横にいる亜矢を横目で見る。彼女はさつきから黙ったままであった。けれど、その顔には薄っすらと笑顔が浮かんでいる。

彼女は今、どんなことを考えてるのだろうか？

この雨音がなければ、彼女の心の囁きが拾えるかもしれない……

……

だからこそ、この無情に降る雨が憎かった。

家が近くなったとき、彼女は急に立ち止まる。

「裕さん、少し時間もらえませんか？」

彼女の表情も声のトーンも真剣そのものである。そんな彼女に押され、僕はコクリと頷いた。

灰色に染まる空の下、僕らは近所の公園のケヤキの下にいた。すべてを濡らそうとする雨粒も、広々と葉を広げる大樹には敵わないらしい。

亜矢はそこに来ると、傘を閉じた。カチャツという金属音は公園の中に広がり、雨の音でかき消される。そしてまた雨の音だけが聴覚を支配するのだ。

そんな公園で、僕らは二人、木に背中を寄せる。こんなに近い距離にいるのに、その数センチがやけに遠く感じる。

亜矢は灰色の雲をジーっと見つめている。彼女の目にはどんな風景が見えているのだろうか？

僕もその景色を共感しようと空を眺める。だがそんなことで答えが見えてくるはずはなかった。

「裕さん……………聞いてほしいことがあります」

「……………なに？」

彼女はこれほどないほど真剣であった。僕はその態度に応えるために身体を彼女のほうへと向ける。

「そのミサंगा、お姉ちゃんと同じものですね？」

「ああ……………」

どうやら彼女は気づいていたらしい。過去に亜季が話したのだろう。

「裕さんは……………今でも、お姉ちゃんのことが好きなんですか？」

彼女の口調は静かであった。けれどもその静かな声はこの雨よりも大きく聞こえた。

「僕は……………」

以前、笹本とした会話を思い出す。彼は僕に同じ質問をしてきた。しかし僕は答えを出してない。

亜季のことは好きなんだ……………けれどその感情は今のものなのだろうか？

過去に縋った、僕の思い出のカケラのようなものなのではないのだろうか？

結局、答えを出すことは出来ずに、僕は沈黙だけを守り続けた。二人の沈黙を雨の音だけが埋める。この雨がなければ辺りには何の音もないに違いない。

この重い沈黙が痛い……………ここに沙理奈や笹本が乱入してくれば、どんなに良い事か……………

だが、僕の想いは虚しく、時間だけが過ぎていく。

そして、その沈黙をかき消すかのように彼女は口を開いた。

「裕さん……………私は、坂上 亜矢は……………あなたが好きです——」

その言葉を聞き、僕はまるで脳天に何か落ちて来たのかというぐらいの衝撃を受けた。目の前が揺れる感じまでする。彼女は今何と言ったのだ……………？

彼女は僕の言葉を待っている……………何か言わなければ——
でも——

僕は自分の言葉を何も出せなかった。そこにあるのは沈黙のみだった。

先ほどの沈黙よりも長い時間が僕らの間にはあった。

その永遠のなか僕はひたすら自分の中の答えを探すのであった。

亜矢は僕の顔をじっと見て——

その瞳はとても綺麗な輝きをしていて、とても強くて——

瞳に映る、男は何かを怯えるように震えているのだ——

「今すぐ答えは聞きません……………だから——」

彼女は僕の気持ちを悟ったのか、そんなことを言ってくれた。逃げる訳ではないのだが、その言葉はともありがたかった。と
りあえず、この場から解放されるのだから——

「あ——雨、上がりましたね……………」

「そうだね……………」

「帰りましょうか」

「ああ……………」

彼女はその後、笑顔を見せてくれる。でも僕は分かっていた。彼女の笑顔は強がりなのだ。と。

雨の午後とキツネ坂

あの日からもう一週間が経とうとしている。

依然答えの出せない僕にも、亜矢はいつも通り接してくれる。

彼女の笑顔を見ると、心の奥底の吹き出物を潰したような、激しい痛みが込み上がってくる。だが、そんな痛みに晒されながらも、僕は答えを出せないでいる。

僕は臆病者だ。彼女に答えを言えば、僕は必ず何かを失ってしまう。
う。

それが怖い。怖いのだ!!

だから、僕は答えない—— 答えられない——

そして痛みに耐えられなくなった時、ここへ来る。

坂の上の夕焼けはいつも綺麗だった。あれから亜季は僕へと姿を見せてくれない。

だが、僕は坂の上に登ることを止められなかった。

これをやめてしまえば亜季にもう逢えない、そんな気がして……

……

ある日の昼休み、僕は屋上へと上っていた。今日はここには誰もいない。

それもそのはずだ。空からは大粒の雨が落ちてきて、無防備なコンクリートを濡らしている。

僕は入り口の軒下からずっとグラウンドのほうを見ていた。何をしようとしている訳でもない。ただ一人で居たかったのだ。教室に

いれば否応無しに亜矢に顔を合わせてしまうから……

一人でいると頭の中に色々なことが入ってくる。亜季のこと亜矢の告白のこと――

考える……でも、答えは出ない。

どんなにイメージを頭の中で膨らませても、僕が満足する答えには行き着かない。

僕はこのまま永遠に悩み続けなければならないのだろうか？

叫びたかった。この雨に負けないぐらいの大声で――

どんなことを叫ぶ？ なんでもいい。この気持ちが楽になるなら、なんでも――

「裕くん」

僕が叫ぼうと息を溜めていると、突然背中から声が掛かった。夕イミング的に僕は声を飲み込むしかなく、それと同時に吸い込んだ空気が肺に流れ込む。

「うほっ、うほっ！」

「う、ごめん？ 驚かせた？」

沙理奈は僕の様子を見て謝罪の言葉を述べる。

「いや、大丈夫……」

彼女の不意打ちで、むせ返りながらも僕は平然を装って言葉を口に出す。

「沙理奈、どうしてここにいるの？」

いてしまった。

「今日の夕方は晴れる予報だから、坂の上に行ってみるといいよ」
「えっ？」

彼女はそう言い残した。

「沙理奈——今なんて……」

疑問を問うべく、彼女を追おうとしたが、既に彼女の姿はなかった。

沙理奈の予想通り、午後になると雨は上がっていた。

学校が終わるや否や、僕はキツネ坂を目指して足を進めていた。

先ほどの雨はコンクリートに数々の水溜りを作り、それらは僕の旅路を邪魔する障害に思える。ぬかるみを踏みつける足底冷たい。少し靴の中に浸水したようだ。

しかしそんなことでは僕のスピードは変わらなかった。

今日は何かが起こる、そんな気がしていた。それが良い事か、悪いことかは分からないけど………

急いで登ったせいか僕の額には薄っすらと汗が出ていた。心臓も平常時よりも早く鼓動をしている。体温と対照的な冷たい秋風が心地よい。

僕は坂を登りきった。坂の上には誰もいない。亜季が待っていてくれるという期待は外れた。だが諦めるのはまだ早いだろう。

雲から顔を出した太陽はまだ高い位置にある。彼女と逢うときは決まって夕暮れ時であるし、まだ可能性は残っている。

僕は少し湿った椅子に座りながら、時が経つのをひたすら待って

いた。鳥の声と午後の暖かい日光が僕の身体を包む。このごろ寝不足のせいか意識が途切れ途切れになる――

夢を見た。おそらく、これは僕の幼い記憶だろう。

手を握っている少女は亜季だ。彼女は僕をキツネ坂の上へと連れて行くこうとしている。そうだ。この日は少し寒かったっけ。なのに亜季は半袖で、「寒くないか」と聞けば、「寒くない」と答えたんだよな。

「うわぁ……今日の夕焼け、綺麗っ！」

「うん。そうだね」

亜季は僕へと微笑んでいる。覚えている。この夕陽も、亜季の笑顔も。

けれど、僕は知っている。これが亜季との最期の思い出ということ――

「ねえ、裕ちゃん」

「なに？」

「裕ちゃんって、この場所好き？」

「うん。好きだよ」

「じゃあ、さ。ずっーと、私と一緒にここに来てくれる？」

「ん？ なんで？」

「どうなの？」

「えー。なんでだよ」

「いいから。どうなの？ 私が頼んだら、いつでもここに連れて来てくれる？」

「うーん。いいけど。水曜日はダメだよ。？マジカル戦士・テルルン？見るんだから」

僕は苦笑した。今考えると、面白いタイトルのアニメだと。

「水曜は……いいけど、そのほかの日は？」
「うーん。いいよ」

亜季はニツコリと笑った。

「じゃあ、約束ね。はい」
「指きり？ 子供じゃないんだから——」
「いいから。はい」
「……うん」
「ゆびきりげんまん——」

何が「子供じゃない」だ。亜季の問いの質問にも気が付いていない癖に……

鼻先にフワリと何かが触れた。くすぐりたい——僕はまだ、
亜季と一緒にいたいのに——起こさないでくれ——

「裕。起きて」
「ん——」

僕は目を開けた。目の前には小さい背丈の女の子がいた。最初は亜季だと思ったが違う。亜季にはそんなフワフワな耳などついていないのだから。

彼女は猫じゃらしを持ち、再び、僕の鼻をくすぐってくる。猫じゃないというのにこんな扱いは屈辱だ。

「やめて」
「やだ——と言ったら」
「はあ………」

ため息をつき、僕は身体を起こした。それに合わせ、少女も僕から数歩離れる。後ろについた尻尾はフワフワと宙を漂った。

「寝ぐせ」

彼女は僕の頭を指す。僕は気になって頭に手櫛を掛けた。

「嘘」

僕の慌てる様子を見て、彼女はクスリと笑った。

「はあ……………」

おちよくられているのか知らないけど、怒る気にもなれない。相手は子供だし、それに彼女がいるということは、これは夢の中に違いない。ということは、さっき覚めたのは夢の中の夢——

どれだけ深く眠りたいのだ。僕は。思わず苦笑した。

「君——なんでここにいるの？」

「君じゃない。ビヤッコ」

「ビヤッコ？」

「名前」

「ああ」

ビヤッコと言われて、僕が思いつくのは白虎という文字だ。しかし、彼女の風貌から見て、虎という印象は持てない。おそらく、白い狐と書くのだろう。良く見れば、耳はキツネっぽいし。

「白狐は、どうしてここにいるの？」

「人を待っていた」

「奇遇だね。僕も人を待っているんだ」

亜季のことを他人に言うのは気が引けたが、何となく口から出てしまった。まあ、いい。これは夢だし。

それに白狐は亜季の知り合い。そんな気がしたから。

「裕が待っているひとは、大切なひと？」

「ああ……………とつてもね」

「そう」

白孤は僕の隣に腰を掛けた。あまりにも躊躇の無い動きだったものだから、僕は鞆を除ける気遣いも出来なかった。まあ、彼女の身体は小さいので問題なく椅子に座れたのだが。

「裕。食べていい？」

「えっ？」

一瞬、僕を食べるのかと驚いたが、彼女の視線は僕ではなく、鞆の方へと向いていた。鞆のチャックを開けてみると、そこにはシュークリームがあった。

「シュークリーム。好きなの？」

「こくり」

白孤は頷く。これ以上待たせたら、本当に僕を襲いそうな目をしていたので、包装を破り、彼女へと渡してやる。

ハムハムと、白孤は食を進める。隙だらけだったので耳に触れてみる。獣耳は僕の指の動きに合わせピクピクと動き、面白かった。

「裕——」

「あ、ごめん」

いつの間にか白孤は食事を終えており、僕をジトつとした目で睨んできた。慌てて手離すと、彼女は再び鞆の方を向いた。

「ダメだよ。おやつは一日ひとつまで」

姉貴に良く言われた台詞を口にする、白孤は出しかけていた手を引っ込めた。その表情には無念さが見える。相当シュークリームに執着しているらしい。

白孤はシュークリームの余韻を楽しむかのようにボーっとしている。その姿は何だか可愛い。また頭を撫でようと試みるが、フットワーク良く、彼女は僕の手を擦りぬけた。

白孤は柵の傍へと行き、街を見下ろした。そこからの風景は知っ

ている。いつもはあそこに僕がいるのだから。

「裕」

「うん？ 何？」

とても穏やかな言葉で彼女は僕を呼んだ。

「シュークリームのお礼」

「えっ？」

「逢わせてあげる。あの子に」

白狐は振り返り、僕の手を掴んだ。

途端、僕の視界には真っ白な光の壁が現れた。

「わああああっ！」

壁から逃れようと、僕は身を翻えそうとしたが、少女の手がそれを拒んだ。

「臆さないで——」

僕を安心させるかのように、彼女は手に力を入れた。

僕に伝わるのは、小さな圧迫感と温もり。その感触を味わいきる前に僕は光へと飲み込まれた。

まるで光の洪水だ。水が全身を濡らすように光が身体の隅々を通過する。けれどそこには苦しみも痛みもない。温かさ心地よさだけ。

僕はおそらく眠ってしまっ。だってこんなにも気持ちいいのだから——

いつか見た世界で

身体感覚が戻り、僕は目を開けた。目の前の景色は先ほどとは違う。ここはどこだろうか？

坂の上では無い事は確かだ。

辺りに目をやると何とも懐かしい気持ちになる。そうだ。僕はここを知っている。いや、覚えている。

正面にある、あの建物は僕の通っていた小学校だ。そしてここは校庭だ。

少し錆びれたシーソーやブランコ、そしてあの鉄棒。よく亜季と一緒に遊んだ――

懐かしさを胸に僕は歩く。歩幅で気づいた。僕の身体はまた縮んでいる。

なるほど――これだけ小さければ、校庭も大きく感じるだろう。

僕は辺りを見渡した。彼女の存在を感じたから。小さい事は亜季が傍にいる時は、何となく分かった。

「裕ちゃん」

思った通り、亜季が桜の木の陰から飛び出してきた。

「亜季――」

僕は彼女に対しての色々な質問が頭に浮かんた。しかし、それを引っ詰め、代わりに手を出した。

「行こう」

「うん」

亜季は僕の手を取った。懐かしい。この感触もあの時のままだ。

僕から手を繋いだというのに、情けない。行くあての思いつかない僕を引っ張り、亜季は歩いていく。

歩幅は亜季の方が少し大きい。

この頃はずっと亜季の方が背が大きくなるって思っていたっけ。今の僕の身長は170を超えたというのに。

「ねえ、裕ちゃん。商店街のほうに行こう」

「うん」

僕は亜季の行きたい場所へならば、どこにだって行った。川の傍、森の奥、高い丘。

今思えば大したことのない所だったと思うが、あの時の僕は亜季に振りまわされて、勇気を振り絞ってそんな場所について行ったっけ。

商店街には人ひとりいない。いつもは賑やかな場所が静かだと、こつも不気味なのだ。だが亜季の足は止まらない。

亜季は慣れた様子で駄菓子屋へと足を踏み入れた。ここにも誰もいない。懐かしいお菓子だけが棚へ陳列されている。

「裕ちゃんも好きなの選んで」

「え——」

お金はどうするのだろうか？　と考えている間にも、亜季は黄粉

餅の袋を開けて食べていた。

僕もそれに倣い、スナック菓子の袋を開けた。

亜季は店内に供えられた椅子に座り、二つ目のお菓子に手を伸ばしている。子供ながらすごい食欲だ。

僕は喉が渴いたのでソーダ味のアイスを食べた。それを真似し、亜季もアイスを加える。

目があった。当然のように亜季は微笑む。そして僕も釣られて笑う。

懐かしい。彼女が隣にいるのが当たり前だった日々が。

「さてと、裕ちゃん。少し遠くへ行こうか」

「遠く？」

「うん。いつもの場所」

いつもの場所とはキツネ坂を指すのだろう。彼女はいつもそう。

自分の思いつきである場所へと僕を連れていった。

帰りが遅くなつて何度、両親に怒られた事か。

「嫌なの？」

「ううん。行こう」

断る理由などはないし、僕は亜季の言葉に頷いた。

商店街に出ると、やはり人っ子一人存在しない。無人の商店が客を待つように入り口を開けているだけだ。

「誰もいないね」

「うん——本当はもっと人を造りたかったんだけど、足りなか

ったの」

「……………へえ」

亜季が何を言ったのかは理解できなかったが、僕は頷いた。勘が正しければ、これは亜季の世界。僕にとっては遠き日の思い出の世界。ここには懐かしい風景が存在する。しかし、それは僕にとってだ。

亜季は自分の記憶を具現化したに違いないだろう。季節も時間帯も、さつき食べたお菓子も亜季の大好きな物だった。そして、この僕の姿さえも――

坂の道に行く。身体が小さいお陰か、急な坂道を登るのに苦を感じない。

少し大きい、亜季の歩幅に合わせながら、僕は歩く。

中腹に差し掛かった時、歩道の右側に何かが見えた。途端、僕の心臓はドキリと音を立てて鳴った。

そこには地蔵があり、その近くには花の山があった。蒲公英、コスモス、向日葵など季節関係なしの色とりどりの花が横たえられている。

亜季は道端に咲いていた小さな桃色の花を摘むと、その山の天辺に置いた。そして手を合わせるのだ。

「亜季……………」

僕はそれ以上何も言えなかった。ここは僕が事故にあった場所。

そして亜季にとっては自分の死んだ場所なのだろう。

僕は自分の記憶を紐解いた。思い出さないように頑張って心の奥底に縛りこんでいた記憶――

しかし、この状況で思い出すなという方が難しかった。

七年前、僕らはこのようにして坂を登った。あの時も提案したのは亜季だ。

いつものように峠の広場で夕陽を眺めた。その日の夕焼けは綺麗だったと思う。

そこで少しの間、亜季と話をした。最期の会話は鮮明に覚えている。

そして、帰り道。僕たちは少し早足で坂を下った。もう少しで日が暮れそうだったし、お腹が減っていたからだ。

峠の中腹、そう、この場所で、僕たちは命運を分けた。

耳を劈くクラクションの音は、まだ思い出せる。その音に僕たちは振り向いた。目の前には大きな車。おそらくトラックがいて――

――僕の記憶はそれっきりだった。

僕が目覚めたのは病院のベッドの上。もうその時には亜季はこの世にいなかった。

両親から亜季が死んだ事を聞き、僕は頭が回らなかった。

死ぬという意味は当に理解していた。けれども自覚をすることはできなかった。亜季は隠れているだけで、少し時間を置けば出てきて僕に見舞いのお菓子を持ってくるのではないかと思っていた。

しかし、いつまで経っても、亜季は僕の目の前に現れる事は無かった。

彼女の死をやっと頭で理解できたのは病院を退院し、間もなくの事だ。彼女の家に招かれ、仏壇を覗いたその時だ。

遺影の後ろにある亜季は笑っていた。だがそこ亜季はもう動かない。僕に話しかけもしない。

僕は泣いた。その時、死というモノを受け入れたに違いなかった。泣くだけではなく、僕は謝った。彼女の両親へと。「僕だけ助かってごめんなさい」と。

許しを請えば、亜季の両親はすぐに許してくれた。いや、元々僕を恨んだりはしていなかったのだろう。しかし、僕は自分を許せなかった。

一緒にいた僕が助かって、なぜ亜季だけが居なくなったのか――

亜季は僕の右手を掴み、車道側を歩いていた。

あの時、僕が車道側を歩いていれば、亜季は助かったのかもしれないと――

今でも時折思い出し、後悔の念に駆られる。

亜季の死後、怪我の経過が悪く、僕は都会へと引っ越すことになった。

両親にしてみれば、僕に辛い過去を早く忘れて欲しかったのだと思う。

しかし、僕は、今ここに居る。

僕がここを目指したのは過去の決着をつけるためだった。

亜季との思い出は僕を縛りつける。楽しい思い出も事故の事も――

言い換えるならば、それは亡霊。いつ、どんな時でも僕を苦しめ

た。

友達とも特に交わらず、趣味などを持たず、無気力に過ごしてきた。

そんな自分を変えるために僕は帰って来たのだ。

だが、そんな決意を知らず、彼女は僕の前に現れてしまった。嬉しくない訳ではない。嬉しくない筈がない。

だからこそ、僕は迷っている。よりもよって、彼女の妹と彼女を天秤に掛けているのだ。

「ごめん」

僕の口からは謝罪の言葉が出た。そして涙も。

僕が泣いたら亜季は困るだろう。涙を止めようと必死に目に力を込めるが、それも叶わない。

僕に出来る事は、酷い顔を見せないように俯くだけだった。

突然、頭の上に何か乗った。

温かい――

それは亜季の手であつた。彼女は僕の頭を撫でたのだ。

撫でられた事なんて久しぶりだ。しかも相手は小学生。その事が、何となく恥ずかしかった。

「裕ちゃん、行こう」

僕の涙が治まったのを確認し、亜季は手を差し伸べる。僕は躊躇せず手を取った。やはり亜季の手は温かかった。

僕らはキツネ坂を登り切り、広場へと辿り着いた。そこにあるベンチは僕たちを歓迎している。

やはりここは特等席だ。沈まない夕陽は、僕たちや街を同じ紅の色に染めている。

綺麗だ――

亜季も僕と同じことを思っているに違いない。ただ黙って街を見下ろしている。

もし、亜季が僕と同じ時間を生きていたら、彼女は亜矢と同じぐらいの背丈、同じような容姿をしているのだろう。

ふと、亜矢のことを思い出してしまった。

彼女の姿をかき消そうと、僕が頭を横に振ると、亜季と目が合った。僕は罪悪感を持ってしまい、目を背けた。

「裕ちゃん。もしかして、亜矢のこと考えてた？」

「え……………あ」

考えを読まれ、固まってしまった。そんな僕のことを気にせず、亜季は話し続ける。

「亜矢ってね……………裕ちゃんのこと好きだったんだよ。今もだけど、昔っからね」

「えっ？ そうだったの？」

「うん……………ずっと見てたよ。でも、亜矢ったら人見知りだからね。一緒に遊ぼうって言いだせなかったんだ」

「へえ……………」

「あの子。ずっとそうだった。私の顔色ばかり窺ってさ――」

僕は思い出す。子供の頃から亜矢は僕を見ていた。僕が亜季の家に行けば、必ず顔を出していたし、僕を好いていたのも何となく感じていた。

「でもね。そんな妹が裕ちゃんに告白できたんだよ？ 私、嬉しかったな」

「っ……なんでそれをつ！」

思わず、僕は声を荒立てて亜季の顔を見てしまった。彼女は笑みを浮かべ、僕を見つめてくる。本当に嬉しそうだ。だからこそ、僕の頭に血が昇った。

「いいの？僕は亜季が好きだ。亜季だって僕が好きなんだろう？なのに、いいの？妹に取られちゃって——」

自分で言っていて恥ずかしい。そう思った台詞だが、言葉の勢いを止められず、すべてぶちまけた。

僕は真剣だというのに、亜季は笑った。

「うん。いいんだよ。私って……もう、幸せになれそうもないし、第一、死んじゃってるしさ」

「そんなこというなよ！今もこうして僕と一緒にいるじゃないか！」

僕は亜季と一緒にもう一度生きたい。一緒に遊んで、一緒に話して、ありきたりな日常を送りたいのだ。

「……………ダメだよ。裕ちゃん。私と居たら裕ちゃんは幸せになれないよ」

「それでもいい！お願いだ……亜季、一緒にいてくれ」

僕は自分の思いを込めて、そう言い放った。

僕の言葉を聞いた亜季は泣いた。彼女の泣き顔は久しぶりだった。

「嬉しい……………」

だが、それは悲しい涙ではなく、嬉しい涙であった。

僕はそんな彼女の顔を見た事は無かった。元々、感情表現の豊かな彼女だが、これほどまで感情を表した事は無かった。

「でもね……………やっぱりダメだよ」

亜季は目を伏せ、そう言った。

「私はもう居ないの。裕ちゃんと一緒には居れないよ」

「じゃあ、僕がここに残る。亜季を一人になんてしないっ！」

それは僕の我儘だった。そんなこと可能な訳がないのに――

「ダメ！ 裕ちゃんは待っている人がいるでしょ？」

「待っている人……………」

「そう。おじさん、おばさん、晴海おねえちゃん、それに亜矢。裕ちゃんがなくなったら、悲しむよ」

亜季は少し寂しそうな顔で夕陽を見た。

亜季が死んでからの彼女の両親の顔が思い出された。大人だからと涙を堪えて――僕の怪我を心配して、「今まで亜季と仲良くしてくれて、ありがとう」と言ってくれた。あの顔が。

亜季はもしかして、自分の死に際を覗いてしまったのではないだろうか？ だから僕にそんな事を言ったのではないか？

「ねえ、裕ちゃん」

「なに？」

彼女は少し寂しそうな顔を向け、僕と会話をする。
僕はいつの間にか泣いていた。

「泣かないで。大丈夫だよ」

彼女は僕の頭を撫でてきた。子供じゃないんだからと、手を振り払おうとしたが、僕の頭は完全に彼女の温もりを受け入れていた。

「ねえ、裕ちゃんは亜矢の事、どう思ってるの？」

亜季は僕の顔を真正面から見て、そう聞く。

そうだ。僕は答えを出してはいない。亜季も亜矢も僕の答えを知らないのだ。

そろそろ出さなければいけないだろう。質問の答えを。

「僕は——亜矢が好きだ。亜季と同じくらい」

答えは既に出ていた。どんなに思考を巡らせても、この我儘な答えに辿り着くのだ。卑怯なら罵ればいい。けれど、僕は二人とも失いたくはない。もう二度と——

「そっか。やっぱりね」

亜季はうつむく僕を置いて、ベンチを立ち上がり、柵に手をかけた。

「私ね。亜矢が裕ちゃんを好きなのも知っていたし、私自身も裕ちゃんを好きだった。でも私が好きになればなるほど、亜矢は裕ちゃんに近づけないって、ずっと悩んでたの」

僕は思わず嘖き出した。七年も前に亜季は僕と同じ悩みを抱えていたのだ。当時の僕はアニメや漫画がすべてだったというのにさ。

「でも、悩みは解決だね。私が抜けて、裕ちゃんと亜矢で」

「そんな——」

「ほーら、悲しそうな顔しないの。こればかりは仕方が無いんだから」

「でも、亜季は——僕は、亜季を守りたかったのに——」

僕の間からは今日何度目か分からない涙が零れた。

「裕ちゃん……………裕ちゃんのせいじゃないんだよ。だから、もう自分を責めるのは止めよう」

「だけど……………僕は自分を許せない——」

長年思っていた。亜季に逢えたなら、謝りたいと。キミを守れないでゴメン、と。

「じゃあ、私を守れなかった罰として、言う事を聞いてもらおうかな？　そうすれば許してあげる」

「うん。なんでも——」

なんだか懐かしい。僕が約束を破った時、亜季は僕に同じことを言った。そのほとんどの命令がハチャメチャで、完璧にこなせた事

は無いのだが。

「裕ちゃんは、自分の事を許す事。私の事はずっと忘れない事。それと——」

亜季は僕に眩き、柵に手を掛け僕を見る。夕陽を背にした彼女の姿は見えなくなった。影だけが光に溺れずにそこに残っている。

「亜季っ！」

消えそうな彼女に手を伸ばした。しかし、その手は届かない。後数センチだというのに——

「大丈夫だよ。私はいつも傍にいるよ」

亜季は微笑んだ。僕が見た中で最高級の笑顔で。けれども、僕は

「これが私からの最期の魔法だよ」

手が細い体を包んだ途端、光が溢れ、僕は光の波に飲まれた。だが前の感覚とは違う。

今度は海面に押し上げられるようなそんな気持ちだった。

告白と別れ

光の波が止んだ時、僕の耳は風の音を捉えていた。

無音の世界から這い出し、僕は今ここにいる。ここは僕の世界だ。

僕はベンチに座っていた。隣には白狐の姿もある。

「逢えた？ 亜季に」

「ああ」

僕は立ち上がり、正面を見た。真っ赤な太陽は沈みかけている。その眺めは僕の心臓を高鳴らせた。

「悪い、白狐！ 荷物見といってくれ！」

「御意」

彼女の返事を聞き、僕は駆けだした。やらなければならない事があるからだ。

「それと—— 亜矢に気持ちを伝えてね。妹をよろしくね」

亜季は僕に言った。僕は亜季の命令を聞かなければいけないのだ。

亜季の為、自分の為に——

下り坂を走る。バランスを崩し、前のめりに転んだ。

怪我と運動不足で足がガクガクする。でも、止まる訳にはいかない！

僕は伝えるのだ！

走って——走って——

緩いカーブを曲がった時、制服の少女が目に入った。
その顔は亜季そっくりだ——

「亜矢っ！」

声を出したのは亜矢を呼び止めるためではない。僕を叫ばせたのは後ろからのクラクションだ。

おそらくは大型トラック——

僕は手を伸ばした。必死に——あの子には届かなかった。
たぶん永遠に届かない。だからこそ僕は亜矢を——

強風を巻きあげ、大型車は通り過ぎた。

目を瞑ってしまつて周りの様子は分からない。だが、腕の中には確かに、温かい感触があつた。

「裕さん……？」

亜矢は戸惑いの声をあげた。そりゃ、いきなり抱きしめられたら困惑もするだろう。けれど僕は止まれなかった。

「はあはあ………亜矢、聞いてくれ！」

「は、はいっ！」

僕は息を吸い、一息に言った。

「僕は君が、坂上　亜矢が好きだ――」

言葉は自分で思っている以上にすんなりと口を飛び出した。けれど代わりに彼女が黙ってしまう。

フラれた？　返事が遅すぎたか？　敗北の二文字が頭に浮かぶ。

「裕さん――でも、私、いいのでしょうか？」

「どうしたの？」

「だって、こんなに嬉しいのに………私、姉の顔が思い浮かんでしまうのです。本当に許されるのかって――」

亜矢の顔には涙が浮かんだ。気持ちを素直に伝えたというのに、困った。こんな時に亜季が出てきてくれれば――

「亜矢――」

困り果てた僕は彼女の手を掴んだ。

急なアクションに亜矢は動揺を隠せない。しかし、そんなこと構わなかった。

「行こう！　見せたい景色がある！」

僕は歩いた。亜季と同じように、亜矢を連れて。

今度は僕が連れていくのだ。彼女を、僕らの場所へ。

時間間隔が狂っているだけかもしれないが、今日は夕陽が沈むのがやけに遅い。

ありがたい。これで最高の風景を長く楽しめるのだから。

後ろのベンチは空だったが、敢えて僕は柵の付近に立っている。
白狐と荷物が消えているのは気になるが、まあ、なんとでもなるだろう。

「綺麗——」

亜矢は呟いた。

彼女が言う通り、峠からの眺めは絶景だった。

亜季と見た、先ほどの風景よりも綺麗に見える。それは何故だろうか。

北風が冷たいというのに、右手は温かい。僕の掌は彼女の手を握り続けていた。拒む様子も無いので、僕は彼女の体温を拝借し続けている。

「裕さん……裕さんって、今もお姉ちゃんのことが好きなんですか？」

「ああ。もちろん」

「そうですか……」

僕のハッキリした答えを聞き、彼女は意気消沈気味に呟く。

「私って……裕さんの、その、彼女になる資格ってあるのでしょうか？」

「どうして？」

「だって、裕さんはお姉ちゃんのが好き。私はお姉ちゃんに何も勝てませんし——裕さんを好きな感情も、たぶん……」

亜矢も縛られているのだ。過去に。亜季の存在はそれほど大きいものだったのだろう。

だが、僕たちは進まなければいけない。未来へと。亜季もそれを

望んでいるのだから。

「亜矢——僕は亜季を守れなかった。事故で失ってしまった。過去は変えられないと分かっているのに、後悔ばかりする。けど——」

僕は進もう。未来へと。

「だからこそ、彼女の分まで、生きなくちゃいけない。だから——僕は決めた。僕は亜矢を守りたい。亜季の分まで」

亜矢を守る保証などどこにもない。陳腐なペテン師の言葉かもしれない。

けれど、僕は誓った。自分自身、そして亜季自身に。

長い沈黙だった。

だけど、その沈黙は以前のように重いものではない。おそらく僕は彼女の返事を分かっていたからだ。

「姉ちゃんのため——私は自分が前に進めないのをお姉ちゃんのせいにしていたのかもしれないですね……………」

亜矢は僕の手を離し、柵に手を置いた。

「この風景。いつまでも私と一緒に見てくれますか？」

「ああ。もちろん——」

この瞬間。僕たちは結ばれたのだろう。
証など形のあるものは存在しないが、おそらくこの時に——

パン、パンっ――

そんな神聖な空間に、突如、音が鳴り響いた。

驚いて振り向いた途端、顔に細かくて細長いものが絡みついてくる。いったい何が起きたというのだろうか？

絡まった物を振り払うと、目線の先には二人の少女の姿が見えた。

「おめでとーっ！」

「パチパチパチパチ」

「亜季！ それに、白狐まで……」

彼女らがなぜここに現れたのかも分からない。唯一理解したのは、彼女らがやけに嬉しそうな事、僕らに向かってクラッカーを鳴らしたということだけだった。

「えっ？ お姉ちゃん？ えっ、えっ？ 耳……それに尻尾……」

亜矢は目を丸くし、亜季、僕、それに、獣耳の少女を交互に見るのだ。

「裕さん………これって……」

「ああ、僕もちっと分からない状況なんだけど――」

説明を求める目で亜季を見るが、その当人も答えを持ってはいないようで、隣の少女に助け船を求めるのだ。

「何？ 顔に何か付いている？」

全員の視線が集まった所で彼女もそれに気が付き、不思議そうに首を傾げた。

「みんな、この状況を説明してもらいたいんだって」

「正直、面倒」

「えーっ、そんなこと言わないで、ね？」

亜季は慣れた様子で白狐に両手を合わせ、お願いをする。僕らはその様子を見守るしかない。

「分かった。説明する」

亜季の交渉の末、彼女は口を開けた。その口調が如何にも面倒臭そうだったのは気のせいではないだろう。

「私は白狐。一応、神様」

「ええっ？ 神様……ですか」

亜矢はたいそう驚いた目で、目の前の小さい子供を見下ろした。初耳の僕もそりゃ驚いた。けれども、なんだか納得だ。だって耳の生えた人間なんて、現世に存在する訳ないし。

「で、その神様が、なぜここにいるんだ？」

「契約の一環。これで亜季の願いを完全に叶えた」

「お姉ちゃんの願い？」

亜矢は亜季の顔を見つめた。彼女の表情はまだ固い。死んだはずの姉に逢えた事がまだ信じられないのだろう。

「亜季の願いつて、どんなこと？」

僕は亜季に問う。

「それはね。裕ちゃんが私無しで、生きられるようになるまで見届ける事」

「はあ。そうですか……………」

亜季の言葉の通りだったら、今までの僕が亜季無しじゃ生きていけない存在であつたかのように聞こえてしまう。まあ半分はそうかもしれないが。

「裕は大丈夫。もう亜季無しでも生きていける。保障する。コイビトも出来たし」

その言葉に顔が赤くなる。良く考えてみれば、僕は二人の目の前で亜矢に告白したことになる。亜矢も同じことを考えているようで、頬を赤く染めている。

「亜季。そろそろ時間」

「あつ、そうなんだ」

嫌な予感がした。亜季の表情が少し曇つたからだ。亜季の嘘は分かり易いから。亜矢も気が付いている。

「お姉ちゃん…………行っちゃうの？」

先に亜矢が声を出した。頭の良い彼女はもう分かっているのかもしれない。

「うん。ごめんね。本当は亜矢とも、いっぱいお喋りしたかったんだけど……………契約って白狐がうるさいからさ」

「うるさくない。これでも寛大な処置。本当なら、最期の時間を与えていない」

文句を言われた当人は、亜季に向かって眉を吊り上げてみせる。だが、亜季は大した反省の色も見せず、亜矢と抱き合った。

亜矢は泣いてしまった。

抱き合う彼女らを見ると、歳の離れた姉妹のように見える。とは言っても、背の高い亜矢が亜季の妹になるのだが。

僕は何も言わずに彼女たちを見守った。亜矢も僕と同じ、それ以上で亜季と触れあいたかっただろうし。邪魔をするべきではない。

「ねえ、今度は裕ちゃんの番。ハグしよ」

「えっ？」

付き合ってすぐに他の女子と抱き合っているのだろうか、迷ったが、亜矢の目は僕を許してくれているように見える。

「じゃ、じゃあ……………」

僕は亜季を抱きしめた。折れそうなほど細い背中に僕より少し低い体温。どこからするか分からない良い匂い――

本当ならば、ずっと抱きしめていたかった。しかし、時間が迫っているらしい。亜季は僕の背中を軽く叩いた。

僕が名残を惜しみ、身体をそっと離すと――
突然、口を顔で覆われた。

「あっ！」

後ろで悲鳴が聞こえた。亜矢の声だ。

まったく、亜季の奴——最初から、最期まで僕を困らせやがって

.....

「ごめんね.....これだけは、妹にも譲れなかったの」

女兒とは思えない色っぽい声で亜季は言った。

まさか、こんな形でファーストキスを経験するとは思わなかった。

「あはは。お姉ちゃんにはやっぱり敵わないや」

亜矢はそう言って笑ってくれた。

それに釣られ、僕は笑う。

これで最期でも惜しくないほど、大きく、盛大に。

「亜季——」

「うん」

白狐の口から言葉が出る前に亜季は柵の方へと移動した。

二人が並んだ所で、白狐が空へと手をかざす。途端、光の大群が現れた。これがあの世とこの世を結ぶ門なのだろうか。

本当に行ってしまうのだ。彼女は。

引き止めるという選択肢が無かったわけではない。しかし、彼女の笑顔を見てしまえば、そんな考えを起こせなくなる。

亜矢も同じだ。涙を堪え、笑って見せている。

「お姉ちゃん。私、お姉ちゃんの方まで、生きる」
「うん。頑張つて!」

亜矢は再び、亜季と抱き合った。涙を流さないということに彼女の決意の固さが見受けられた。

「裕ちゃん」

「なに?」

「ありがとう」

亜季は珍しく、僕に頭を下げた。

「氣にするなよ。僕と亜季の仲だろ」

「ふふ。裕ちゃんは優しいね」

亜季は悪戯に笑った。

まったく。この顔、忘れられそうもないな。

「それじゃ。亜矢、身体に気を付けて。裕ちゃんは亜矢を泣かせちゃダメだよ」

「うん」

亜矢は返事をし、僕は黙って頷いた。右手でグーサインをしたのを亜季も気が付いたらしい、小さいピースが返ってきた。

「行くよ」

「うん」

白狐は亜季ともに光に包まれていく。
神秘的だった。天国に召されるって言葉が良く似合う光景だった。

亜季の背中に向かい、僕は居ても経ってもいられなくなり、叫んだ。

「亜季——っ！　今までありがとな！」

言葉が届いたのかは分からない。しかし、最期に亜季は笑顔で居てくれた気がする。

彼女たちの姿が完全に見えなくなった時、僕らは暗闇に取り残されていた。

先の景色には街頭を照らした、街しかない。そこに愛おしい幼馴染がいた事を疑いそうになるほどだ。

「行っちゃいましたね」

「……………うん」

亜矢も僕と同様に、ボーッと街を眺めている。しかし、彼女の瞳には、前に存在しなかった強い光が宿っているのを感じ取れた。

彼女は姉から受けた言葉を反芻し、心に刻み込んでいるのだろう。

息を吸った。今日の風は冷たい。完全に冬が近いらしい。

短い秋は僕に色々な思い出を残してくれた。その大部分に登場していた幼馴染はもういない。それを僕は受け入れなければならないのだろう。

僕らには未来があるのだから。

「寒いね」

「そうですね——」

「帰ろうか」

「ええ。そうしましょう」

「帰りにホワイトフォックス寄ってかない？　少し、何か食べたい気分だから」

「いいですね——あっ」

亜矢は僕の腕を見ている。そこにあつた筈の色あせたミサンガはどこかにいつてしまっている。

地面を見れば、そこにプツリと切れた、紐が落ちていた。

「切れちゃいましたね」

「うん」

僕はミサンガを拾って、内ポケットにしまった。

僕の願いは叶ったのだろう。だって——

「じゃあ、行きましょう」

「うん」

こうして愛すべき人を見つけたのだから。

天国の門の前で

「ここが入り口」

白狐はそう言って私の手を離れた。目の前には大きな白い扉が見えている。あの先が多分、俗に言う天国なのだろう。

「へえ。三途の川とか、お花畑を想像してたけど、扉なんだ」

「イメージは人それぞれ違う」

「へえ」

昔からお城に住みたいなどと想像していたせいで、大きな扉なのだろうか。

扉を見ると、取っ手も何も付いていない。これをどうやって開けるのだろうか？

まさか自分で押すわけではないと思うのだが。

「そろそろ行くけど、心残りは？ あの扉をくぐったら、現世には戻れない」

「心残り………いっぱいあるかな」

私の言葉を聞き、白狐は少し困った顔をする。

「亜季。私は本当に願いを受け入れられた？」

「そりゃ、裕ちゃんとも喋れたし、亜矢にも逢えた。十分だよ」

白狐は私の言葉を聞いても、釈然としない表情を取る。

「そんな顔しないでよ。白狐には本当に感謝してるんだよ？」

事故の直後、私は自分が死んだ事も分からず、その場に縛りつけられていた。

毎日同じ場所から同じ景色を眺めていた。たまに通る人に声をかけては無視され、何度泣いた事か。

そんな私に気が付いたのは、人間ではなく神様だった。

白孤はまず私に謝った。自分の力では助けられなかった事を。

そして知った。事故の事、私が死んだ事。そして、もう一人。ずっと待っていた人が今、危篤であるという事を。

自分の死以上に裕ちゃんの事が気にかかった。裕ちゃんを失いたくなかった。

私は白孤に願った。「あなたが本当の神様なら、裕ちゃんを助けて欲しい」と。

彼女は答えた。「裕を助ける事もできる。でも、あなたは一生彼と生死を別つことになる」と。

問いの意味が理解できなかった私は、がむしやりに「助けて欲しい」と、頼み込んだ。

あそこで助けを求めなければ、おそらく裕ちゃんと私は結ばれたのだろう。

でも、死の淵にある大切な人の生を願うことしかできなかったのだ。

白孤は私の願いを叶え、裕ちゃんを助けてくれた。本当なら、私と言う存在はそこで消えている筈だった。

けれども、私は現世を離れる事が出来なかった。

「亜季——ごめんな……………」

裕ちゃんは私にそう言っていた。その言葉だけで、彼の痛みを感じてしまったから。

「お願いだよ！ 白孤！ もうひとつだけ、願いを聞いて」「無理」

「そんな……………この通り、何でもするからっ！」

「……………はあ。分かった。願いを言って」

随分無理を言っ、お願いを聞いてもらったものだ。

「亜季。私も、あなたと居て、楽しかった」

白孤は言った。

彼女は願いを聞き入れる代わり、ある条件を提示した。

「その代わり、私の遊び相手になって」

白孤の言う通り、私は彼女と七年を共にした。友人として。それは裕ちゃんと過ごした日々と同じ長さだ。だから、彼女との別れも何だか寂しい。

「白孤は、これからどうするの？」

「どうもしない。今まで通り」

「寂しくない？」

「……………少し」

「そっか……………」

私は彼女のこと一人にしてしまう。そのことがどうしても気になっていた。

「心配しないで。私は一人じゃない。それにあなたも」

私は頷いた。

そうだ。私ももう縛られてはいないのだ。
進もう。未来へと。

裕ちゃんも亜矢も幸せを手に入れたのだ。私だって――

「じゃあね」

私は手を振り、光の扉へと寄った。
息を吸い込み、扉を押した。

エピソード ― キツネ坂にて ―

ある秋の夕暮れ。僕は神社に来ていた。この鳥居をくぐるのも何回目だろうか？

鳥居の脇においてある狐の像を見ると、あの子の姿を思い出す。あの日のことはまるで昨日のことのように思い出せる。

横に居る亜矢も僕と同じことを思っているのだろう。

境内を進むと、巫女服を着た女性の姿を見ることが出来た。

「やあ沙理奈」

僕は彼女へと挨拶をする。

「こんにちは、裕くん。亜矢さん」

沙理奈は僕らの真ん中で手を繋ぐ女の子のことを見て驚く。

「亜季ちゃん、大きくなったわね。何歳だっけ？」

「今年で3歳です」

亜矢は穏やかにそう言う。

「そっかー。もうそんなになるんだ……………」

彼女は昔を思い出すような遠い目をする。

「ああ、結構あつという間だよな」

そう。思い返せばあの頃からもう8年もの年月が経っている。

僕は高校を卒業し、同じ大学に進んだ。そして卒業すると同時に籍を入れたのだ。

そして生まれたのが、この子。津谷 亜季だ。

僕は以前から女の子が生まれたら亜季と名づけたいと強く思っていた。

その思いを叶えるかのように亜矢はしっかりと健康な女の子を産んでくれたのだ。

これもどこかのちいさな神様のお陰なのかもしれない。

「せっかくだし、お茶でも飲んでいく？」

沙理奈は僕らにそんな言葉を掛けてくれる。

「ごめん。先にやることがあるから後でもいいかな？」

「あつ、そうね。構わないわよ」

彼女は笑顔で承諾してくれる。

そんな彼女と別れ、僕ら三人はお堂の前に来て賽銭箱に小銭を投げ込む。

「おとーさん、がらがら、あたしがやるー!!」

「はいはい」

僕は亜季を抱っこして、綱を取らせる。

亜季はその綱をがむしゃらに振り、上からする鈴の音が境内に響いた。

僕は手を合わせ、願いを込める。

この願いを彼女は聞いてくれるのだろうか？ いやそんなことは確かめるまでもないだろう。

そして僕はお堂の中に入り、御神体の白い狐の前に小さな包みを

置き一礼する。

「白狐、お前の好きなシュークリームだぞ。大事に食べるよ」

返事が無いことを確認して、僕はお堂から出た。

「終わった？」

「ああ」

「おとーさん、おかーさん、はやく、ひがくれちゃっよ」
「はいはい」

僕らは亜季に急かされるように、神社から出て、坂を登っていった。

秋の落陽は3人の影を長く長く地面へと写す。亜季はその影の様子に気を取られ、何度も後ろを振り向く。

「ほら、亜季。もう見えるぞ」

僕らが手を離すと、亜季は元気よく柵のほうに走っていく。

「わあー!!」

そして彼女は感嘆の声を漏らす。
そこには驚くほどの紅があった。夕陽はすべてのものを紅に染める。

だがその景色は前見たものとは違っていた。

無機質のビルは自然を削り、着々と思いの風景を変えていく。だけど…………

「景色は変わっても、ここが綺麗なのには変わらないね」

亜矢はそう呟いた。

「ああ、景色が変わってもあの思い出は一生色あせないよ」

僕は亜矢と見つめあう。

いつも見ている顔だが今日はいつも以上に綺麗に感じてしまう。

「あの子とお姉ちゃんも見てるかな……………」

「見てるよ、きっと……………」

亜季と白狐にもう逢えないと思うと少し寂しい。

「けど、僕らはもう奇跡なんて頼りにしちゃいけないんだよ」

「そうだね……………」

僕たちはもう十分に幸せにしてもらった。これからは自分たちの力で未来を切り開いていかなければいけない。

「あー、おとうさんとおかあさん、らぶらぶ」

「こら、亜季。どこでそんな言葉を覚えてきたんだ!？」

僕は亜季を抱き上げる。

「ふふ、亜季ったら」

亜矢も僕へと抱きついてくる。

動けなくなつた僕がふと木の上を見上げると着物を着た少女がいしそうにシュークリームを頬張っているのが見えた……いや、見えた気がした。

「おとーさん、なにみてるの？」

「いや、なんでもないよ」

「む？ ほんとー？」

「ああ」

そういつて僕は亜季の髪を撫でる。

「亜季ばかりずるーい。私も！」

「おい、亜矢っ？」

亜矢はいきなり、僕に抱きついてきた。
いつも以上の積極性に僕は驚いた。

「まったく……さあ、神社へ戻るよ」
「はい」

二人は声を合わせて僕に返事をする。
僕らは3人で手を繋いで坂を下りていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0332u/>

キツネ坂

2011年8月11日03時40分発行